

大坂城跡 XI

大阪府営上町第1期住宅(建て替え)建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査報告書

2009.3

財団法人 大阪市文化財協会

大坂城跡

XI

大阪府営上町第1期住宅(建て替え)建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査報告書

2009.3

財団法人 大阪市文化財協会



SE94出土の土器・陶磁器・硯

大坂城跡

XI

大阪府営上町第1期住宅(建て替え)建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査報告書

2009.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大阪を南北に通る上町台地の北端は、古代には難波宮、近世には大坂城が置かれた、我が国の政治的中心地であった。特に、近世には大坂城・城下町の整備が豊臣氏から徳川氏に受け継がれ、大坂は産業・経済・文化の中心として発展し、現代都市の大坂の原型となった。

本書は、2007年度に大阪府営上町第1期住宅の建設工事に伴って実施した発掘調査の報告書である。調査地は、豊臣期には三ノ丸の推定範囲内、徳川期には大坂城代屋敷地があった武家地であり、検出した遺構からもこのことを裏付ける瓦や陶磁器類が出土している。

さて、明治維新によって武士階級が姿を消し、大阪は大きく様変わりしたが、その後工業都市として発展し、大正期には日本一の工業生産額をほこる都市となり、「煙の都」と呼ばれた。このような近世から近代にかけての都市の変遷を、調査では武家屋敷地から畠地、そして宅地へと移り変わる姿を考古学的に復元し、大阪がたどった都市の歴史の一端を示すことができた。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで種々のご尽力をいただいた大阪府住宅まちづくり部、地元住民の方々、ならびに関係各位に心より御礼申し上げます。

2009年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、財団法人 大阪市文化財協会が2008年1月18日～5月9日に中央区上町1丁目で実施した、大阪府営上町第1期住宅(建て替え)建設事に伴う難波宮跡・大阪城跡発掘調査(NW07-4次、NWは難波宮跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と遺物整理、報告書作成の費用は、大阪府の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人 大阪市文化財協会 文化財研究部次長 南 秀雄の指揮のもとで文化財研究部難波宮調査事務所 趙哲済・同学芸員 大庭重信が担当した。
- 一、本書の執筆および編集は、南の指揮のもと、主として大庭が行った。また、第Ⅱ章第1節2)は趙が、第2節2)iii)の陶磁器・土器・石製品・羽口は同部学芸員 宮本佐知子、土製品は同部学芸員 川村紀子が、4)iv)は大阪歴史博物館学芸課学芸員 酒井一光が、第Ⅲ章第1節は宮本・川村がそれぞれ分担執筆した。本書の用字用語や体裁等の調整は、文化財研究部技術管理担当課長 田中清美ほか、趙、同部事業企画課担当課長代理 清水和明、同部事業担当係長 佐藤隆らの報告書校正委員が行った。
- 一、基準点測量および写真測量はアジア航測株式会社に委託した。
- 一、遺構写真は担当調査員が撮影した。遺物写真の撮影は西大寺フォト 杉本和樹氏に委託した。
- 一、発掘調査や報告書作成の過程で、多くの方々の協力を得た。特に、出土陶磁器については大手前大学大学院文学研究科博士後期課程 赤松和佳氏に、近代長屋建築については大阪市立都島第二工業高等学校 和田康由氏に、それぞれご指導・ご教示いただいた。また、戦前の調査地とその周辺地域の状況については、市内在住の新免百合子氏、東大阪市在住の豊田郁子氏にそれぞれご教示いただいた。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏から多くの援助を得た。深く感謝の意を表したい。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。

凡 例

1. 調査次数に冠したアルファベットについて、NWは難波宮跡、OSは大坂城跡で、たとえばNW07-4次という調査は2007年度4番目の難波宮跡の調査であることを示す。各調査を示す場合、本文中ではNWを冠するが、位置図などでは特に断わる必要がないかぎり省略した。
2. 本書で用いた層序学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相のパターンは、[趙哲済1995]に準じる。
3. 遺構名の表記は、溝(SD)、井戸(SE)、土壕(SK)、その他(SX)の分類記号の後に、調査時の統一番号を付している。なお、近代の遺構のうち、防空壕・炉・住戸はそれぞれの名称の後に新たに番号を付している。
4. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はTP値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。また、挿図中の示北記号は、図1は真北、それ以外は座標北を使用した。
5. 本書で用いた地層の土色および遺物の色調は、『標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。
6. 本書で使用する近世の時期区分については、これまでの大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用している。

豊臣前期	本願寺焼亡(1580(天正8)年)より、大坂城三ノ丸築城開始(1598(慶長3)年)まで
豊臣後期	三ノ丸築城より、大坂夏ノ陣(1615(慶長20)年)まで
徳川期	大坂夏ノ陣後

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の環境および調査に至る経緯と経過	1
第1節 遺跡の環境	1
第2節 周辺の調査成果	3
第3節 調査に至る経緯と経過	6
第Ⅱ章 調査の結果	7
第1節 層序	7
1) 調査地の層序	7
2) 小断層	9
第2節 遺構と遺物	10
1) 古代以前	10
i) 前期難波宮回廊の追及	ii) 検出遺構
iii) 出土遺物	
2) 近世	13
i) 落込み	ii) 土壌・井戸
iii) SE94出土遺物	
3) 近代前半	32
i) 第3c層上面の遺構・遺物	ii) 第3a層上面の遺構・遺物
4) 近代後半	40
i) 通路	ii) 長屋建物の間取り
iii) 衛生施設	iv) 防空壕
v) その他の遺構・遺物	vi) 煉瓦
第Ⅲ章 遺構と遺物の検討	51
第1節 SE94出土遺物について	51
1) 土器・陶磁器について	51
2) 陶磁器と石製品からみた調査地の住人について	51

3)土製品について	52
第2節 調査地周辺の近世から近代の様相	54
1)土地利用の変遷	54
2)長屋建物について	56
第IV章 まとめ	59
引用・参考文献	61
あとがき	
索引	
英文目次	

図 版 目 次

- 1 調査地遠景
上：1928(昭和3)年撮影調査地周辺の航空写真
下：調査地遠景(北東から)
- 2 地層断面
上：1区西壁地層断面(東から)
中：1区東壁地層断面(北西から)
下：1区西南隅で検出した小断層(北から)
- 3 古代以前の遺構
上：3区全景(南から)
中：SP281検出状況(西から)
下：NW04-2次調査8トレンチ(北から)
- 4 近世の遺構
上：SE94検出状況(南から)
中：SE122検出状況(北から)
下：SX190地層断面(北から)
- 5 近代前半の遺構
上：1区東半第3c層上面検出状況(東から)
下：1区東半第3a層上面検出状況(東から)
- 6 近代後半の遺構(1)
上：1区第2a層上面検出状況(西から)
下：1区第2a層上面検出状況(東から)
- 7 近代後半の遺構(2)
上：通路検出状況(西から)
中：便所・水琴窟(SK02・54・55)検出状況(南から)
下：炉1検出状況(東南から)
- 8 出土遺物
上：後期難波宮の瓦
下：SE94出土土人形

挿 図 目 次

図1	調査地の位置	1	図25	SE94出土土製品(2)	30
図2	豊臣氏大坂城三ノ丸の推定範囲	1	図26	第3c層上面の遺構	32
図3	周辺の調査地	2	図27	SD157断面図	32
図4	1863(文久3)年の絵図にみる調査地周辺	2	図28	SD157出土遺物	32
図5	前期難波宮の殿舎配置と調査地周辺の状況	3	図29	第3a層上面の遺構	33
図6	NW86-2次調査地の位置と断面模式図	4	図30	SD74断面図	33
図7	NW04-2次調査主要トレンチの地層断面柱状図	5	図31	第3a層上面高平・断面図	34
図8	調査区配置図	6	図32	SD74出土磁器	36
図9	1区地層断面模式図	7	図33	SD77・159・191出土磁器	37
図10	1区東壁・西壁地層断面図	8	図34	SD74・191出土陶器	38
図11	小断層分布平面図および断面図	9	図35	SD74・77出土厨家具	39
図12	前期難波宮回廊棟通りライン上の横断面図	10	図36	第2a層上面・下面の遺構	40
図13	3区平面図およびSP281断面図	11	図37	長屋建物の配置	41
図14	古代以前の出土遺物	12	図38	住戸5と関わり復元案	42
図15	1区近世の遺構平面図	14	図39	SK154断面図	43
図16	近世の井戸断面図	15	図40	便所・水琴窟関連遺物	44
図17	近世の土壌・井戸出土遺物	17	図41	防空壕1・3平・断面図	45
図18	SE94出土肥前磁器(1)	19	図42	「時局防空必携」(1943年)に記された防空壕模式図	45
図19	SE94出土肥前磁器(2)	20	図43	炉1平・断面図および出土土管	46
図20	SE94出土肥前磁器(3)	21	図44	SK30・193出土遺物	47
図21	SE94出土中国製青花・萩焼・肥前陶器・京・信楽系陶器	23	図45	出土煉瓦刻印	49
図22	SE94出土瀬戸美濃焼陶器・備前焼・丹波焼	25	図46	SE94出土土器・陶磁器組成	51
図23	SE94出土埴輪鉢・軟質施釉陶器・土師器・石製品・羽口	26	図47	土器・陶磁器類と土製品の組成	53
図24	SE94出土土製品(1)	29	図48	調査地周辺の近世から近代の様子	55
			図49	近代長屋・借家の諸例	57

表 目 次

表1	SE94出土土製品観察表	31
----	--------------	----

写 真 目 次

写真1	1区南壁第1層高断面	7	写真5	SE94出土硯・水滴	51
写真2	一文牛121の腹部	28	写真6	「下久」の陶刻	52
写真3	SK72検出状況	43	写真7	皿129の裏面	52
写真4	防空壕5	45	写真8	付近に残る近代長屋	58

第Ⅰ章 遺跡の環境および調査に至る経緯と経過

第1節 遺跡の環境

調査地は上町台地の北端に位置する(図1)。西北側150mには史跡難波宮跡が、北側900mには大阪城天守閣がある。古代および近世初頭には、我が国の政治的中枢があった重要な場所である。

地形的には、難波宮域が立地する台地頂部の平坦地よりも約5m低くなった、台地の東斜面に立地している。周辺の現地地形は街区によって高低差が著しく、坂道も多い。

かつては大小の谷が入り組んだ起伏のある地形であったものを、難波宮造営時にその一部を埋立て、豊臣～徳川期の大坂城造営時には、更に大規模な改変が加えられている。調査地は、豊臣後期には大坂城三ノ丸の推定範囲の南端に当たる[松尾信裕1994] (図2)。また、豊臣氏滅亡後には徳川幕府によって武家屋敷地として整備され、近世の各絵図には調査地が「御城代屋敷」であったことが示されている(図4) (註1)。

近世に整備された街区は、現代にもそのまま引き継がれている(図3)。近代になると、それまでの武家屋敷地の多くは軍用地として使用されることになるが、調査地域は空閑地として残された。1897(明治30)年には大阪市に編入されて東区清堀の一部となり、1900(同33)年に字名をとって寺山町とされた。1979(昭和54)年には住居表示の実施に伴い中央区上町1丁目となり、現在に至っている。

註)

(1) 図4および図8の絵図については、大阪歴史博物館の了解を得て使用した。

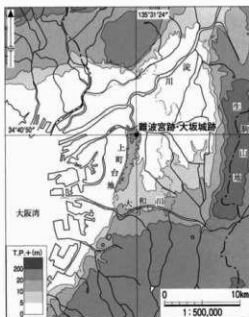


図1 調査地の位置



図2 豊臣氏大坂城三ノ丸の推定範囲
([松尾1994]より作成)

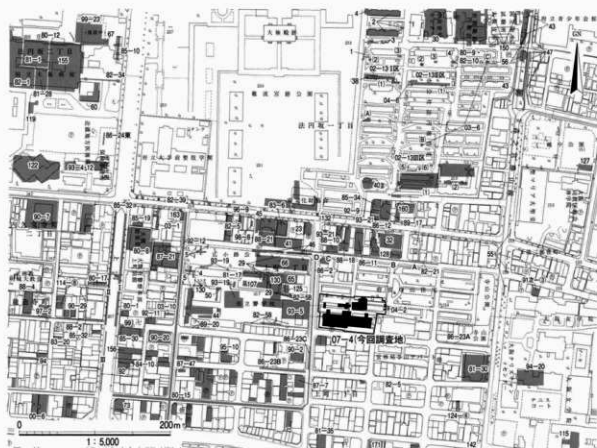


図3 周辺の調査地



図4 1863(文久3)年の絵図にみる調査地周辺〔「国宝大阪全国」部分 大阪歴史博物館蔵〕

第2節 周辺の調査成果

周辺では、今回調査地の西側を中心にこれまで多くの調査が行われており、古代の難波宮に伴う遺構や、大坂本願寺期・豊臣期・徳川期といった中世末から近世にかけての遺構が検出されている。これらの調査成果は『難波宮址の研究』第十二〔大阪市文化財協会2004〕などで報告されているが、今回の調査と係わる隣接調査の知見を概観する。

調査地西側の大阪市立登学校敷地内で行われたNW93-5次調査では、前期難波宮の「朱雀門」(宮城南門)と東西に取付く回廊跡が検出されている(図5)。門の規模は東西5間(23.52m)、南北2間(8.83m)で、柱痕跡は直径0.8m前後ある。柱内には朱鳥元(686)年の火災に伴うとみられる焼土や炭の細片が含まれていた。これに取付く回廊は南北の梁行が2間の複廊で、門跡の東側で9間分、西側で1間分検出。西側の跡きはNW93-19次調査でも確認されている。

野学校敷地と今回の調査地との間にある北から南へ急に下る南北道路では、1986年度に下水管渠築造工事に伴う調査が行われ(NW86-2次)、南北約200mにわたる地層断面が記録されている(図6)。比較的平坦な北側のD区では、地山の高さがTP+20mあまりあり、重複する南北棟の掘立柱建物が検出されている(SB704・705)。これらは前期難波宮期の中で代替えられたものとされ、位置から東朝集院に比定されている。また、今回調査地の西南端に当るC区南半では、北から南へ地山が急激に

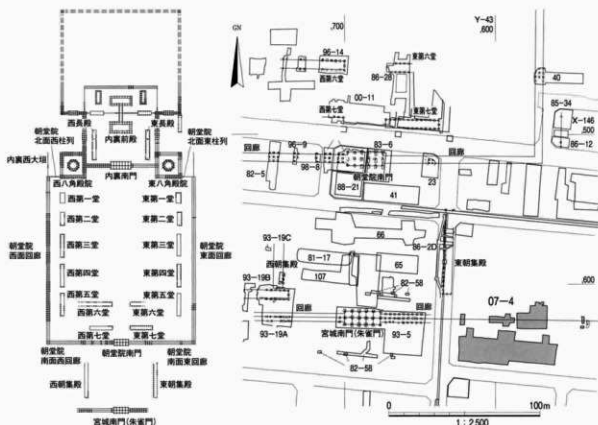


図5 前期難波宮の殿舎配置と調査地周辺の状況

落込み、以南では徳川期後葉の整地層の下に、最大3mを超える分厚い整地層が確認されている。この整地層内で花崗岩の自然石を用いた東面する石垣が確認されており、石垣の上面の高さはTP+11mある。石垣や整地層の時期を決める遺物は出土していないが、南側にある東西方向の内安堂寺町通が豊臣氏大坂城三ノ丸の南限と推定されていることから[岡本良一1970、松尾1994]、この石垣は豊臣期の可能性があり、これを埋めた整地層は三ノ丸造成時もしくは元和年間の復興事業に伴うものと推測されている。周辺の古地形復元では、この落込みが古代以前の谷地形を反映したと復元されているが[寺井誠2004]、西隣で行われた複数の調査では、いずれも地山が高いレベルで検出されており、谷の存在をうかがわせるような古い地層は確認されていない。自然の傾斜地を加工した人工の段あるいは堀の西辺が、現在の南北道路の位置に存在したようである。今回の調査地と南側の東西道路の間には現在も1～2mの比高差があり、ここが段もしくは堀の北辺に当る可能性もある。

本調査地東側の調査事例は少ないが、2004年度に府営住宅建替に伴う試掘調査が行われ(NW04-2次)、今回の調査地内を含む20箇所のトレンチ調査で、おおまかな地層の分布状況が把握されている[大阪市文化財協会2005]。このうち代表的な調査地点の柱状図を図7に示す。調査の結果、①現在の地形と同様、地山の標高は西北から東南へ傾斜しており、西北部では近世以前の地層が大きく削平されていること、②中央部に古代に埋められた南北方向の谷が存在すること、③谷の周囲で古代の遺構・地層が遺存していること、などが判明した。特に、8トレンチでは古代とみられる柱穴を2基確認し、このうち北側のSP01の柱筋は、前期難波宮「朱雀門」に取付く回廊の中央柱の東延長線上にあり、宮域を限る塀もしくは回廊の柱穴の可能性が指摘されている。

古代に埋められた谷は、16～18トレンチで確認され、北側のNW82-21次調査[大阪市文化財協会2004]、NW128次調査[大阪市文化財協会1981]、NW32次調査[難波宮址顕彰会1969]でも続きが確認されていることから、谷は北北西から南南東へ延びていたと考えられる。この谷の南側には、現

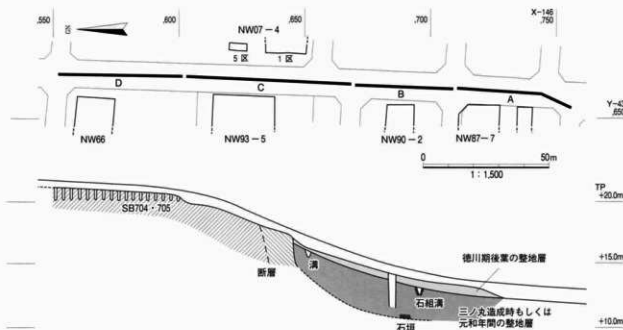


図6 NW86-2次調査地の位置と断面模式図

在でも周囲より低くなる南北道路があり、古い谷の名残の可能性がある。NW04-2次調査では整地層から土師器・須恵器の破片が出土したものの、細片のため詳細な時期は不明であるが、北側のNW128次調査では、整地層が上下に分かれ、それぞれ前期・後期難波宮期に当たるとされている。

図7では、参考までに東南側で行われたNW94-20次調査の地層断面柱状図をあげておく。NW04-2次の各調査区よりも標高が低く、調査区の西半で西北-東南方向の谷の東北肩を検出している[大阪市文化財協会2004]。谷底は確認していないが、下半には前期難波宮の頃とされる整地層が確認され、その上を10世紀代の遺物を含む地層が覆っている。谷はその後も形を留めており、豊臣前期には畠地として利用されたが、その後三ノ丸造成に伴うとみられる厚さ3m以上の整地層で埋められていた。この場所の現地表面が周囲より高いのは、この際の造成による可能性がある。西側で行われたNW81-30次調査の東南隅では、この谷の西肩とみられる落ちが確認されており、上述したNW04-2次調査で確認した谷とは別の谷が東側に存在したようである。周辺にはこのような南北、もしくは西北-東南方向の小支谷が複数あり、南側に想定されている東西方向に延びる谷(上町谷)[寺井2004]に取付いていたのであろう。



図7 NW04-2次調査主要トレンチの地層断面柱状図

(等高線は国土地理院発行の数値地図1/10000「大阪城」と同5mmメッシュ「京都及び大阪」の一部をもとに作成した)

第3節 調査に至る経緯と経過

今回の調査地は、中央区上町1丁目に所在する府営上町住宅(旧寺山住宅)の西南隅に位置する。当住宅は戦後まもなく建てられた集合住宅で、近年建物の老朽化が著しく、高層住宅への建替えが懸案されていた。当地域は難波宮の東南隅に当り、西隣の大阪市立聾学校敷地では、前期難波宮の「朱雀門」とそれに取付く回廊が検出されるなど、歴史上重要な場所である[大阪市文化財協会2004]。そのため、住宅の建替えに先立ち、全域を対象とした試掘調査を2004年度に実施し(NW04-2次)、20箇所でトレンチを設定して地層の分布状況と遺構の有無を確認した[大阪市文化財協会2005]。

この結果をもとに、府営上町第1期住宅の建替えが計画され、2008年1月18日より事前の発掘調査を実施した。まず、調査地南半の住宅建設予定部分に調査区を設け、重機により現代の整地層を除去したのち、平面調査に着手した。この調査区を1区と呼称する。また、調査地北半に前期難波宮の東西回廊が通っていることが予想されたことから、想定されるライン上に2～5区を設け、1区の調査と併行して遺構の確認作業を行った。

2008年4月23日には、1・2区を対象とした航空測量を実施した。調査は5月2日まで行い、5月9日には埋戻しを含めたすべての作業を完了した。

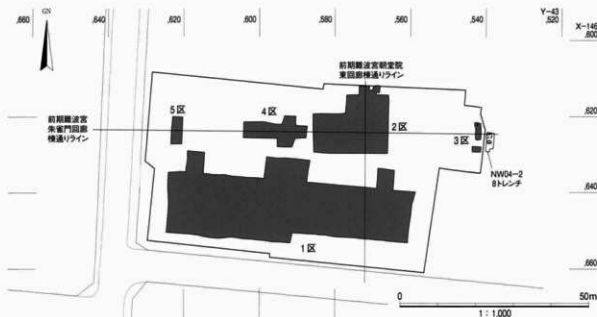


図8 調査区配置図

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

1) 調査地の層序

1区では、現地表面(TP+17.2~18.0m)より下の約3.0mまでの地層を第0~5層に区分した(図9・10、図版2)。2~5区では、第1~4層はほとんど遺存しておらず、第0層および第5層のみ分布していた。以下、調査地の層序を1区を中心に記述する。

第0層：1948年に開始された旧府営住宅建設に伴う整地層、および現代表土までの地層である。層厚は50~100cmある。

第1層：1945年の戦災直後の整地層で、にぶい赤褐色細粒~粗粒砂からなり、焼土・炭・煉瓦・瓦などを多く含む。上半は畠の作土に利用されており、焼土などの偽礫が下半と比べて細粒化していた。畠は1区南壁断面の西半で、0.9m間隔で並ぶ畝・畝間を確認した(写真1)。層厚は10~20cmある。

第2層：第2a・2b層に大別できる。

第2a層は黄灰色細粒~粗粒砂を主体とし、場所によっては整地の一単位となる薄層を挟む。上面は被熱により赤色化したり、炭の薄層に覆われる箇所があり、1945年6月15日の第4次大阪空襲で被災した生活面である。上面で東西に並ぶ長屋建物を検出したほか、本層を掘削中に近代の遺物を含む土壌などを検出した。長屋建物分布域の上面の高さはTP+16.3mで、層厚は20cmある。

第2b層は1区東南部の低い場所を埋めた整地層で、灰白色粗粒砂~礫を主体とした地山起源の偽礫を多く含む。層厚は最大で70cmある。1区西南隅では最大60cmの土を盛って一段高い平坦面を造成しており、この整地層も第2b層に相当する。

第3層：第3a~3c層に区分できる。

第3a層は1区東南部の低い場所に分布する畠の作土層で、灰色細粒~粗粒砂質シルトからなる。近代の陶磁器類を含み、層厚は20cmある。



写真1 1区南壁第1層畠断面

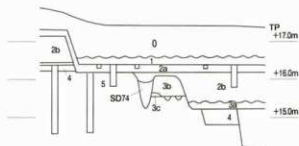


図9 1区地層断面模式図

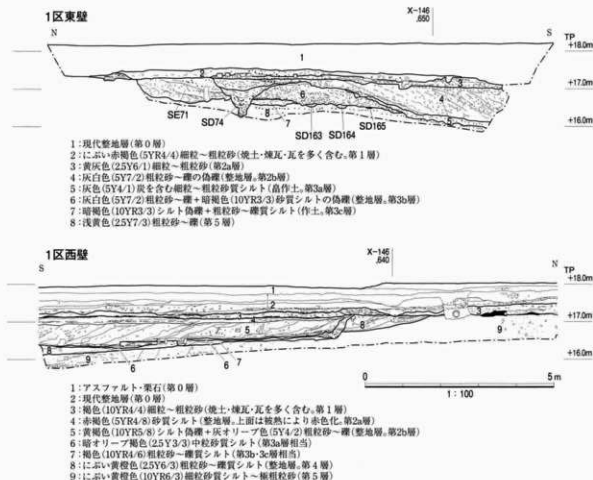


図10 1区東壁・西壁地層断面図

上面で畚を検出したほか、1区北半の高い場所では、畚に伴う東西溝SD74を検出した。

第3b層は1区東南部の低い場所へ至る斜面に分布する整地層で、暗褐色砂質シルトの偽礫を多く含む灰白色粗粒砂～礫からなる。層厚は最大で50cmある。本層を除去後に耕作に関わる溝群を検出した。近代の陶磁器類を含む。

第3c層は1区東端で部分的に遺存していた作土層で、シルト偽礫を含む暗褐色粗粒砂～礫質シルトからなる。

第4層：1区東南部の低い場所に分布する整地層および落込みSX190・191の埋土である。地山起源の偽礫を含む灰白色極粗粒砂～礫からなる。層内には休止面があり、細分が可能である。豊臣前期の瀬戸美濃焼陶器のほか、18世紀代の肥前磁器、京・信楽系陶器などを含む。層厚は最大で150cmある。1区西南隅でも層厚が最大で40cmの整地層が第2b層の下位にあり、18世紀代の陶磁器を含むことから第4層に対比できる。

第5層：上町層の地山である。上方で細粒化し、下部は浅黄色～灰白色の粗粒砂～礫、上部はにぶい黄褐色のわずかにシルトを含む細礫質極粗粒砂～粗粒砂からなる。上部には巢穴の化石が見られる。1・2・4・5区とも層相は共通するが、調査地東端の3区では、これより上位にある赤褐色粘土質細粒砂層が遺存していた。

(大庭)

2) 小断層

I区西南隅で第5層の上町層を切り、完新統の第4層(近世)に不整合に覆われる小断層を検出した(図11、図版2)。

この小断層は断層面がN42°W前後の走向をもち、70°前後の傾斜で南西側が落ちる正断層である。顕著な2本の断層間は0.35~0.4cm程度の幅があり、微細な小断層や節理が発達する初期剪断型に属する。落差は1.5m以上であるが、図11で示したよりもさらに下位の上盤側TP+14.2m付近でも、14.7m付近と類似したわずかにシルトを含む細礫質極粗粒~粗粒砂で、果穴の化石が顕著に分布し、この岩相が下盤側TP+16m近くの岩相とも類似することから、落差は2m程度かと推測される。

本調査地に西隣するNW86-2次・93-5次の両調査地でも上町層を切るN60~85°Wの小断層群が見つかり、本調査地の小断層と一連のものと考えられる。なお、[大阪市文化財協会2004]は両調査地の小断層群を地滑りの跡として記載しているが、断層間物質がさほど著しくは破碎されず、変形しつつも堆積構造をとどめていること、固結の程度が上下盤と変わらないこと、腐植物質が含まれないことなどから、断層活動時期は古く、更新世であったことが推定される。したがって、上町台地形成期の構造運動に起因した小断層である可能性も考慮する必要がある。(趙)

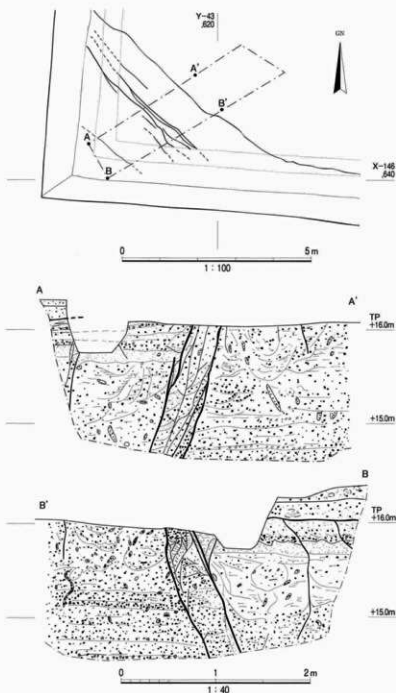


図11 小断層分布平面図および断面図

第2節 遺構と遺物

1) 古代以前

i) 前期難波宮回廊の追及

東西両隣で行われた過去の調査から、前期難波宮の南外郭をなす東西回廊が本調査地の北半を通っていたことが予想され、これに関わる遺構の確認が今回の調査の重要な目的であった。調査結果の報告に先立ち、両隣の調査知見を整理しておく。

南北道路を挟んだ西隣のNW93-5次調査地では、前期難波宮の朱雀門(宮城南門)とこれに取付く回廊が検出され、回廊は南北梁行2間の複廊であることが判明している[大阪市文化財協会2004]。柱間隔は南北梁行が2.70m、東西桁行が2.93mで、前期難波宮の造営尺(1尺=29.2cm)では前者が9尺+1/4尺、後者が10尺に相当する。主軸は前期難波宮の中心軸であるN0度39分56秒E[李陽浩2005]からちょうど90度振った方向に通っている。回廊の柱穴は、掘形が一辺1.2m前後の方形で、柱痕跡は直径0.27~0.42mあり、門に近い中央柱列が太く、かつ深い。柱穴はTP+20.6m前後の地山上面で検出され、深さはそこから0.5~0.8m残っていた。

東隣のNW04-2次調査の8トレンチでは、TP+16.4mの地山上面で古代とみられる柱穴を2基検出した[大阪市文化財協会2005](図13、図版3)。北側のSP01は掘形が一辺1.2mの方形で、深さは約0.2m遺存していた。埋土は地山起源の黄褐色細粒砂で、柱痕跡は直径0.25mある。また、南側のSP02はやや規模が小さく、掘形が東西1.0m、南北0.75mの長方形である。埋土は赤褐色シルトで、柱痕跡が直径約0.3mある。ともに時期を示す遺物は出土していないが、埋土の特徴や規模・位置関係から、SP01は前期難波宮、SP02は後期難波宮の時期の可能性が指摘されている。特に、SP01は前

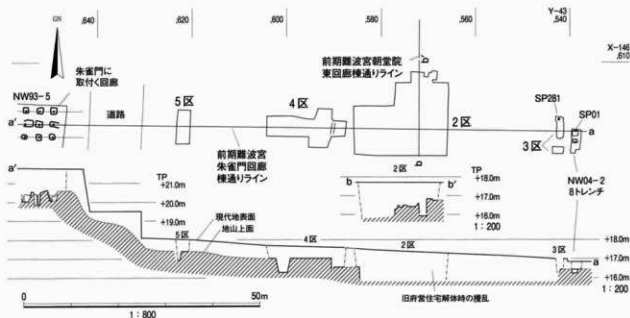


図12 前期難波宮回廊横通りライン上の横断面図

らに0.3m以上破壊されていた。この際の攪乱で十分な検討ができなかったが、NW04-3次調査8トレンチのSP01から西側2.7mの位置で柱穴は確認できなかった。想定される位置に柱が存在しない理由として、斜面に立地するため隣接する柱の深さが一定でなく、この場所では浅かったことから削平されていた可能性と、朱雀門付近より柱間隔が広がっていた可能性が考えられる。今回の調査ではこれ以上の情報を得ることができず、今後の周辺調査でさらに検討していく必要がある。

ii) 検出遺構

上述したように調査地北半の2・4・5区では地山が大きく削平されており、古代以前の地層や遺構は確認できなかった。調査地南半の1区でも同様の状況であった。わずかに調査地東端に設定した3区北端で、古代以前とみられる柱穴SP281を検出した(図13、図版3)。平面は直径0.45mの円形で、深さ0.50m、柱径は0.12mある。掘形の埋土はにぶい黄色の粘土偽礫を含む粗粒砂～礫で、柱は抜取られていた。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴や規模が小さいことから、難波宮下層遺跡に関わる古墳時代後期後半のものの可能性がある。東側のNW04-2次調査8トレンチを含めた調査範囲でこれに組み合う柱穴は確認されていない。

iii) 出土遺物

後世の遺構・地層から後期難波宮期の瓦や古墳時代の須恵器が出土しており、1～6を図化した(図14、図版8)。1・2は3区第0層、3・5・6は1区の近世井戸SE94、4は1区の近代の炉1出土である。

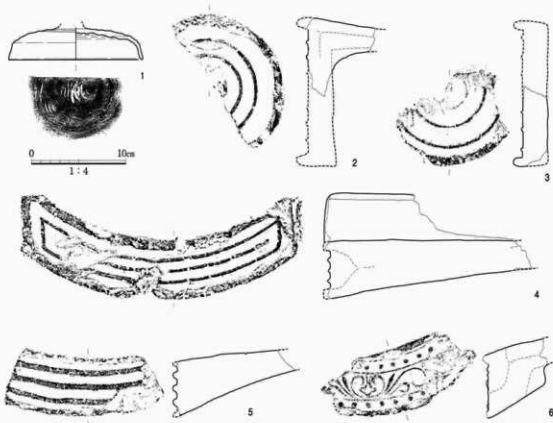


図14 古代以前の出土遺物
3区第0層(1・2)、SE94(3・5・6)、炉1(4)

1は須恵器杯蓋で、口径14.1cm、器高3.3cmある。天井部にはつまみが剥離した痕がある。天井部から口縁部へはなだらかに移行し、境界には弱い沈線を巡らす。天井部の1/2に回転ヘラケズリを加えている。内面には同心円の当具痕がある。TK43型式に位置づけられよう。

2・3は重圏文軒丸瓦である。2の瓦当は復元径15.6cm、厚さ2.9cmあり、第1圏は残っていないが、第2圏の内径6.6cm、第3圏の内径10.0cmに復元できる。第3圏と外縁との間隔が広く、圏線は細い。6022型式であろう[大阪市文化財協会1995]。3の瓦当は復元径15.5cm、厚さ2.6cmあり、第1圏の内径3.8cm、第2圏の内径7.2cm、第3圏の内径11.5cmに復元でき、第3圏と外縁との間隔が狭く、圏線は細い。6014型式であろう。ともに胎土はやや軟質で灰色を帯びている。

4・5は重圏文軒平瓦、6は均整唐草文軒平瓦である。4は瓦当部分がほぼ完存しており、端部幅28.7cmをはかる。外縁は厚く直立し、内区に断面が丸みを帯びた細い弧線を3本配する。長さは最大で21.3cm遺存していた。側面および端面をケズリで整えている。近代の炉の構築物として転用されたようで、表面は熱を受け赤色化している。6574型式と考えられる。5は瓦当の一部が残存していた。内区に幅太の弧線を3本配し、外区は残りが悪いが、内区の弧線とほぼ同じ太さである。6574D型式であろう。6は瓦当中央が残っており、中心飾りは上向きのC字形中心葉のなかに花頭形の垂飾りをおき、両側に唐草文を配する。界線を挟んで上下の外区には、円形の珠文を配する。6664B型式であろう。4・5が直線頸であるのに対し、6は段頸で、頸部の粘土継ぎ目がよく残る。4～6の胎土は軒丸瓦同様、やや軟質で灰色を帯びている。

2) 近世

1区東南部の周囲より低い場所で、第4層を埋土とする落込みSX190・191を検出した(図15)。それ以外の高い場所では近世の生活面・地層は削平されており、地山である第5層上面で当該期の土壌・井戸を複数検出した(図15)。

i) 落込み

SX190 1区東南部で検出した、調査区外南側へ続く大規模な落込みである(図15、図版4)。東西幅約6.0mで、底は北から南に向けて低くなっており、調査区外南側へ更に低くなる傾向がある。調査区南端での深さは1.7mあった。西辺はほぼ垂直に地山が掘込まれているのに対し、東辺は傾斜が緩やかである。また、西辺の上端は東辺よりも約0.6m高い。北側は現代の擾乱で破壊されていたが、西北端に西側へ延びる張出しがあり、内部へ降りる際のスロープの可能性がある。底付近には機能時に堆積した暗褐色細粒砂質シルト層が分布しており、そこからコンニャク印判が押された肥前磁器など、18世紀代の陶磁器や瓦片が出土した。その後、偽磔を含む細粒砂～礫で埋められていた。

SX191 1区東南部の調査区南壁沿いで検出した、南側へ下がる落込みで(図15)、北肩は東西方向に延び、東側で南に折れ曲がる。西側はSX190に切られていた。調査区内で確認した深さは0.4m(TP+14.8m)であるが、南側へ更に下がるようである。最下部に堆積した褐色シルト質粗粒砂～礫層からは、18世紀代の京・信楽系陶器片が出土した。

SX190・191は切合いがあるが、出土遺物には時期差がなく、ともに南側へ低くなり調査区外南側

へ延びていた。近代の削平に伴うものだが、SX191の北側4mにも、1m近い東西方向の段があり、南側への傾斜面を削り出して雛壇状の段を造成していた可能性がある。

ii) 土壌・井戸

SK76 1区東北端で検出した土壌で、南北1.3m、東西1.6m以上、深さが0.4mある(図15)。出土遺物から近世のものと判断した。丸・平瓦片とともに、豊臣期の金箔押軒丸瓦20が出土した(図17)。直径22cm前後に復元できる大型品で、瓦当は内区に巴文のみを配し、珠文は用いられていない。

SE71 1区東端で検出した直径1.5mの素掘りの井戸で、深さは1.6mある(図16)。底付近に掘削時に生じた偽礫や崩落土が堆積し(4層)、その上は地山起源の偽礫を含む粗粒砂～礫で埋められていた

(1～3層)。上半には拳大の礫をまとめて投棄していた。遺物は肥前磁器染付碗14が出土した(図17)。17世紀中頃のものであろう。

SE125 1区東部で検出した直径0.8mの素掘りの井戸である(図15)。深さは1.6mまで確認したが、底は未検出である。地山起源の偽礫で埋められていた。備前焼播鉢と肥前磁器青磁の小片などが出土したが、詳細な時期は不明である。

SE160 SE125の西隣で検出した直径1.0mの土壌で、深さは1.5mある(図16)。垂直に掘込まれており、底は平坦である。底には機能時に堆積した地層が認められず、全体が地山起源の偽礫で埋められていた。形状から井戸を意図して掘削されたが、使用されずにすぐに埋戻されたと考えられる。近世の瓦小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

SE187 1区東部で検出した、平面が直径2.5mの大型の井戸である(図16)。深さ2.1mまで掘下げたが、以深は湧水のため確認できなかった。地山起源の粘土偽礫や粗粒砂～礫で埋められていた。埋土下半の偽礫はレンズ状に堆積し、その間の粗粒砂～礫がラミナ状に含まれることから、下半を埋めた際に井戸内には水が溜まっていたことがわかる。埋土中から京・信楽系陶器碗15(註1)、肥前磁器青磁皿16が出土した(図17)。15は完形品である。高台を除く内

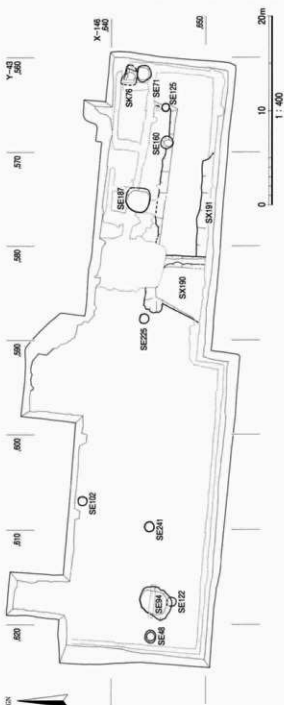


図15 1区近世の遺構平面図

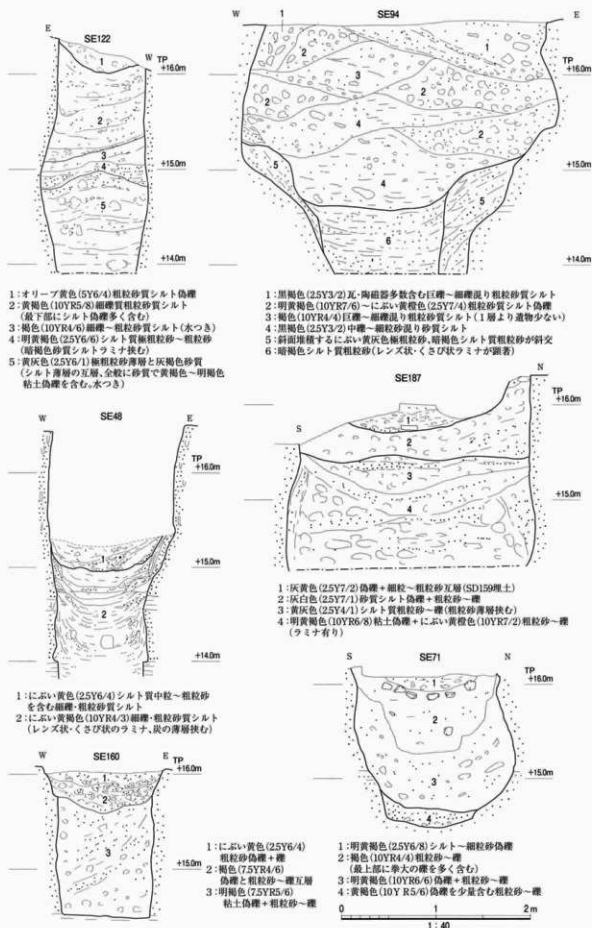


図16 近世の井戸断面図

外面に緑灰色の釉が掛かる。18世紀後半以降のものである。16は底部内面を蛇ノ目状に釉剥ぎした、17世紀後半代の波佐見系の粗製品である。

SE225 1区中央のSX190西北側で検出した直径1.0mの素掘りの井戸で(図15)、深さ2.0mまで確認したが、底は湧水のため検出できなかった。瀬戸美濃焼陶器皿13(図17)のほか、粗製の中国製白磁や青花の破片など、豊臣後期の陶磁器が出土した。

SE102 1区西北部で検出した直径0.9mの素掘りの井戸である(図15)。深さは1.9mまで確認したが、底は確認できなかった。地山起源の粗粒砂・礫で埋められていた。埋土から肥前陶器碗・瀬戸美濃焼織部向付・備前焼鐔などの豊臣後期の陶器小片が出土した。

SE241 1区西部で検出した直径1.0mの素掘りの井戸である(図15)。深さは1.3mまで確認したが底は未検出である。地山起源の粗粒砂・礫で埋められていた。埋土から備前焼鐔・丹波焼甕・肥前磁器など、18世紀後半頃の陶磁器の小片が出土した。

SE122 1区西南部で検出した直径0.9mの素掘りの井戸である(図16、図版4)。深さは2.5mまで確認したが、底は未検出である。埋土の2～5層は偽礫を多く含む水つき堆積層で、放棄後、比較的長く時間をかけて断続的に埋まったと考えられる。肥前陶器大皿・瀬戸美濃焼織部向付など豊臣後期の陶器小片が出土した。後述するSE94に切られていた。

SE48 1区西端で検出した直径1.3mの素掘りの井戸である(図16)。深さは2.6mまで確認したが、底は未検出である。埋土の2層は、炭の薄層や細礫・粗粒砂質シルトをレンズ状・くさび状に挟む層である。井戸機能時から放棄後にかけて徐々に堆積したとみられ、最終段階に地下水位はTP+15.2～15.3m付近にあったと推定できる。また、1層から上はその後一気に埋めたものである。

遺物は肥前磁器染付碗7・8、色絵碗9、白磁碗10、染付猪口11、染付皿12、肥前陶器鉢17、土師器焙烙18・19が出土した(図17)。8は高台内に「大明成化年製」銘があり、11は底部内面に手描による五弁花、高台内には二重方形枠内に渦「福」を記す。12も内面にコンニャク印判による五弁花を配し、底部内面を蛇ノ目状に釉剥ぎしている。9は口縁部が短く外反する薄手の色絵碗で、染付は口縁部内外面に渦文、体部外面に梅樹文で、赤・緑・金・黒色で上絵付している。内面には人物が描かれている。17は三鳥手の大型鉢で、底部内面に砂目痕が7箇所ある。18・19は難波洋三氏のD類に相当する[難波1992]。以上は18世紀の前葉から中葉にかけてのものと考えられる。

SE94 SE122の北側でこれを切る、直径3.0mの素掘りの大型井戸である(図16、図版4)。深さは2.6mまで確認したが、底は未検出である。下半は直径1.5m前後と細くなる。埋土下半の5・6層は、井戸機能時の水つき堆積層で、一度掘直されている。また、TP+15.0～15.3m付近の壁面は、初期の井戸機能時に水に洗われて侵食されており、当時の地下水位がこの付近にあったと推測される。埋土上半は井戸放棄に伴い埋められたもので(1～4層)、陶磁器・土器・瓦をはじめとした大量の遺物が含まれる。遺物は特に上半で多く出土した。次項で報告するように、19世紀前半代の遺物が主体で、井戸廃絶に伴いまとめて投棄したものと考えられる。型紙摺で染付された瀬戸美濃焼磁器など、埋土上半には近代の遺物が若干含まれるが、後代の遺構の重複を認識できなかったための混入品と判断した。

(大庭)



図17 近世の土壺・井戸出土遺物

SK76(20)、SE71(14)、SE187(15・16)、SE225(13)、SE48(7~12、17~19)

iii) SE94出土遺物

SE94からは陶磁器・土器・石製品・羽口・土製品が出土した。その中の陶磁器は産地ごとに分類し記述する(註2)。軟質施釉陶器は、土師器・瓦質土器とともに土器に含める(註3)。陶磁器・土器の破片数の出土比率は、陶磁器が73%、土器が27%である。

a. 陶磁器

肥前陶磁器、京・信楽系陶器、瀬戸美濃焼陶磁器、萩焼、丹波焼、備前焼、堺鉢鉢と数点の中国製青花・白磁がある。

肥前磁器 21～49で、碗、蓋、皿、水滴、仏飯器、鉢がある(図18～20)。

21は小型の色絵碗で、小さな低い高台に丸みを帯びて立上がる体部が付く。体部外面文様は4分割で赤と別の色で絵が描かれるが、上絵付けのため消えて何が描かれていたのか不明である。22も小型の色絵碗で、小さい高台に丸味を帯びた体部が付く。体部外面の文様は一重網手文の1箇所金魚を描き、体部内面も上部約1/3に圈線を引き、その中に一重網手文を巡らす。23は筒形碗で、体部外面は透明釉の下に条線を引き、文様は口縁端部と中ほどに鉄軸で線を引く。24は染付筒形碗で、体部外面の文様は菊花水裂文、内面は口縁部付近に圈線を、底部に手描の五弁花を描く。25は小型の染付碗で、体部外面の文様は6分割して花枝と小枝を、底部内面には源氏香文を描く。26は染付端反蓋付碗で高台はハの字状を呈す。体部外面は花唐草文を6区画に分け、2種類の記号を3箇所ずつ配す。口縁部付近の内面には四方樺文を巡らせ、底部内面にも文様がある。数点の同文様の個体が出土しているので、蓋付碗が数人分あったことになる。27はハの字高台の碗で、体部外面の文様は大小の丸文を配し高台際にも連続文を巡らす。底部内面にも意匠化した「寿」を書く。口縁部には口紅を施す。28は35とセットになる小型の碗で、体部外面に梵字文を描き、底部内面に「寿」の銘が入る。29は青磁染付の朝顔形の碗である。体部外面は青磁釉を、高台内は透明釉を掛ける。高台端部は露胎でアルミナが付着している。口縁部内面には四方樺文を描く。30は蓋付の直径9.3cmの小ぶりの広東碗である。薄く高い高台に湾曲しながら開く体部を持ち、体部外面に素描の「寿」字の丸文と線描の絵を描く。高台には圈線を巡らせ、底部内面にも絵を描く。焼継ぎをしている。31は染付の広東碗で、薄く高い高台に湾曲しながら開く体部を持ち、体部外面は6分割して字と絵を描き、高台の圈線の間に絵を描く。高台内には「大明年製」と書いている。口縁部内面付近には雷文を巡らし、底部内面には幾何学文様を描く。32は型紙摺の広東碗で、体部外面に三角形を意匠化した文様を施す。口縁部付近の内面は二重圈線を、底部の圈線の中にも摺絵がある。焼継ぎの痕跡がある。

33は青磁染付碗の蓋で、口縁部付近の内面に四方樺文を巡らし、二重圈線の中に五弁花を手描する。つまみ内には二重方形枠内に「福」を書く。34はハの字高台の碗の蓋である。35は小型碗の蓋で、体部外面の文様は梵字文で、内面に「寿」の銘が入る。

36は粗製の染付皿で、体部内面に花唐草文を描き、底部内面にはコンニャク印判の五弁花を押す。体部外面に簡単な唐草文、高台内には字のようなものを描く。37は染付皿で、体部内面は蛸唐草文、底部内面には環状松竹梅文を描く。体部外面には簡単な唐草文を描き、蛇ノ目凹型高台内には二重方形枠内に「簡江」の崩した字を書く。高台にはアルミナが付着する。38は中型の染付皿で、底部内面に



图18 SE94出土肥前磁器(1)

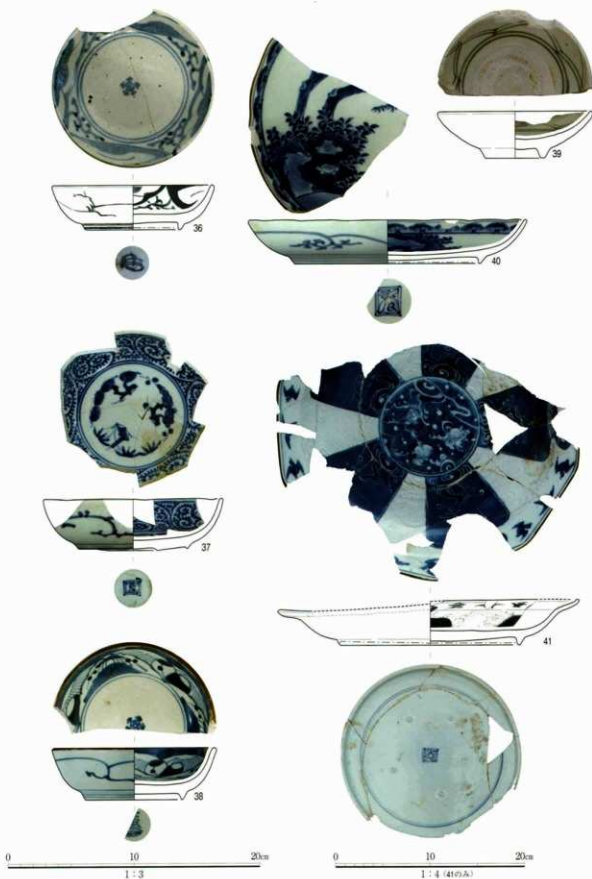


图19 SE94出土肥前磁器(2)



图20 SE94出土肥前磁器(3)

コンニャク印判の五弁花、体部外面には一筆描の唐草文を描き、口縁部には口紅を施す。高台内には銘があり、端部にはアルミナが付着している。39は粗製の染付皿で、体部内面にのみ格子文を描く。底部内面は蛇ノ目釉割し、アルミナが付着している。40は輪花皿で、体部内面に木のある風景画があり、口縁部付近に連続文、端部には鉄釉で口紅を施す。体部外面には一筆描の簡単な唐草文、高台内には二重方形枠に渦「福」を書く。41は型打ち十角形染付皿である。直径が1尺余りの上手の大皿で、内面中央が盛り上がり、濃淡の呉須と白線で波と金魚を描く。底部から口縁部にかけて10に区画し、陽刻された波文と、染付で5本の瓶を描き、その中に中央と同じく呉須の濃淡と白線で波を描く。口縁部付近は飛ぶ鳥を姿態を変えて描き、端部には口紅を施す。高台内には二重方形枠内に「雍正」の篆書の崩し字に似たものが描かれている。この銘は18世紀中葉～末の肥前有田町の樋口窯でのみ確認される[大橋康二1988]。また、18世紀後半に型打ち陽刻文様が樋口窯周辺で焼かれるので[大橋2005]、この皿も樋口窯の製品と考えられる。焼継ぎの痕跡がある。

42は染付の水滴で、表面は型押しで花を描く。43は筆架形の水滴で、型押し成形である。白磁に一部鉄化粧をする。

44は染付の仏飯器である。坏部は深く、外面上半の圏線の間に蛸唐草文を帯状に描く。

45は型打ち成形の輪花染付鉢で、体部内面は宝珠と唐草文が浮き出ている。底部内面には呉須で牡丹文を描く。体部外面は2本線を引き、その中に唐草文で埋め、高台内は二重方形枠内に渦「福」を書く。46は瑠璃釉の端反輪花鉢である。型打ち成形で作られている。47は青磁染付の鉢で、口縁部内面付近に連続文、底部には建物と木を描く。高台は蛇ノ目凹型高台で、二重方形枠内に渦「福」を書く。48は直径22.5cmを測る染付の大型鉢で、体部外面の片面に大きな花枝を、その対面につばみの花枝を描く。底部内面には二重圏線内にコンニャク印判の五弁花を押し、高台内に渦「福」を書く。49は大型の色絵鉢で、呉須と色絵で彩色している。体部外面に草の生えた所に立つ数人の人物を描き、高台には渦巻を描く。内面は、口縁付近に圏線の間に花と枝を描き、底部にも二重圏線の中に文様を描く。この鉢には10箇所以上の焼継ぎ痕跡がある。

中国製青花 4点出土している(図21)。

50は端反の大型の鉢で、内外面2段に仙之祝寿文を描く。底部内面は連弁に開まれた中にも仙之祝寿文を描く。高台内には二重方形枠内に銘があるが、字の部分欠く。

萩焼 3点出土している(図21)。

51と52は大きさの異なる端反碗である。薬灰釉を高台際まで掛け、以下は露胎である。高台内に萩焼に特徴的な反時計回りのロクロ回転ケズリの痕跡が見られる。

肥前陶器 出土した陶磁器中の約2%を占める。53のみ掲載した(図21)。

53は二彩手の甕で、外面上半に白化粧土を施し、鉄絵と緑彩で松を表現している。

京・信楽系陶器 54～69で、碗、杯、水滴、土瓶、灯明皿・灯明受皿、鍋がある(図21)。

54は鉄釉と透明釉を掛け分けた碗である。口縁端部には青色の釉の口紅を施す。体部外面には上絵付けの痕跡がある。高台内に「帶山」の銘がある。京焼の帶山と平衡の銘であろう。この銘のある鉢は豊中市麻田藩陣屋跡からも出土している[大阪府文化財センター2002]。帶山と平衡は延宝年間から明



図21 SE94出土中国製青花・萩焼・肥前陶器・京・信楽系陶器

治中期まで続いた京焼の陶工である。55・56は小型の端反碗である。高台際以下は露胎で、他は透明釉が掛かり貫入が全面に見られる。57・58は小杉碗で、57は体部外面に1本の杉の鉄絵が残存する。松葉と枝の描き分けがはっきりせず8本の線で表現している。58は2本の杉の枝が丁寧に描かれる。これらは畑中編年[畑中英二2003]の4期中段階(18世紀後半)に位置づけられる。59は端反の杯で、陶器の胎土に白泥を塗り、内面に呉須で「弁天座」と書く。外面にも字が書かれている。

60は平面八角形の水滴で、型作りである。表面に花の文様が浮き出ている。

61は小型の土瓶である。小さな三角形の脚を持ち、茶釜に把手と注口を付けたような形で、白泥の上に透明釉を掛け、口縁部付近に緑釉を流し掛けしている。器壁は薄く、胎土は赤褐色を呈している。62は盃台で、藁灰釉が掛かる。63～65は灯明皿で、内外面の口縁部際まで灰釉を掛け、他は露胎である。内面にピンの跡が3箇所ある。64は菊花の付文が大きく、上端は口縁まで達している。外面に煤が付着している。65の内面は3本単位の簡目を交差させて刻んでいる。ピンの跡があり、外面に煤が付着している。66～68は灰釉の灯明受皿である。67は直径が約12.3cmで、受部端は釉を拭き取っている。口縁端部外面以下は露胎である。68は直径15cmを測る。内面には灰釉を掛けるが、受けの端部のみ釉を拭き取っている。69は鉄釉の鍋で、口径18.0cmと小振りである。

瀬戸美濃焼陶器 70～80で、小杯、碗、皿、香炉、片口鉢、壺、瓶である(図22)。

70・71は灰釉の小杯である。70は直径5.8cmで、腰が丸くやや内湾気味に立上がる。高台際以下露胎である。71の体部外面は削りの単位を明瞭に残し、その上に内面から高台際まで灰釉を掛けっている。高台以下露胎である。72は腰の張った筒形の鎧碗で、体部外面は露胎で、回転体施文具で四角や三角の刺突文を付けている。口縁部内外面に鉄釉を掛けっている。73は刷毛目碗で、高台際にわずかに段を持ち、体部は丸味を持って立上がる。内外面に白泥で文様を描き、その後灰釉を掛けっている。高台際以下は露胎で、高台の断面形は方形である。19世紀前半の古瀬戸小西窯で出土した例に近い[瀬戸市教育委員会1991]。74は太白手の皿で、胎土は半磁質で、底部内面の圏線の中に花卉文を呉須で描く。口縁端部は鉄化粧している。75は透明釉の皿で、呉須で体部内面に草花文を、底部内面には五弁花を描いている(註4)。器体の全面に施釉し、高台端部のみ釉を拭き取っている。76は土瓶の蓋で、土瓶の口縁部が当たるところ以下は露胎である。銅緑釉が掛かる。77は円筒形の香炉で、灰落しに再利用されている。体部外面の下端約1/6から高台・底面にかけては鉄化粧し、他の体部外面は長石釉を掛け、鉄釉で花の絵を描く。内面は露胎である。78は天目碗に片口を付けた形の鉢で、鉄釉の上から藁灰釉を掛けっている。高台際以下は露胎である。底部内面と高台内はケズリ痕跡が明瞭である。高台際に団子状の目跡が3箇所残る。79は耳付壺で、外面の口縁部から体部上半に灰釉を掛け、内面は露胎である。80は仏花瓶で、開いた口縁部に短い頸部、腰の張った胴部を持つ。頸部の上端に把手の退化した粘土が貼付く。底部外面は高台がなく平らである。外面に厚く、内面に薄く鉄釉を掛けっている。

備前焼 81～84で、鉢、壺、蓮華、壺がある(図22)。

81は鉢で、平坦な底部からくびれてやや膨れ気味の体部を持ち、口縁部は内湾する。全面に塗土し、外面に火樺が見られる。82はロクロ成形で作られた落とし蓋である。直径12.5cmあり、水指の蓋であろうか。上面のみに鉄分が塗られている。83の蓮華は手づくねで、内面に親子の龍と雲を型押しして

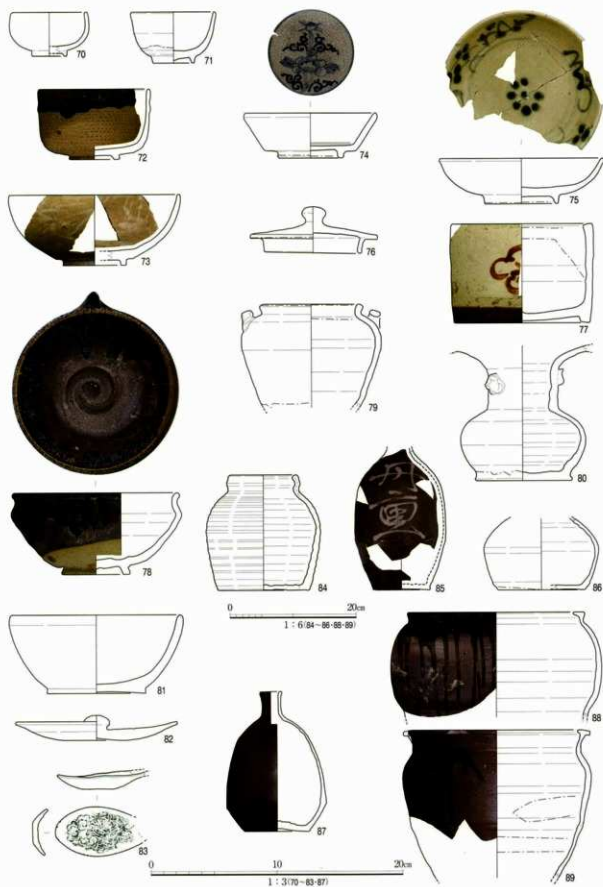


図22 SE94出土瀬戸美濃焼陶器・備前焼・丹波焼

いる。全面に塗土している。84の壺はロクロ目が顕著で、体部に屈曲した口縁部が付き、体部外面と口縁部は塗土する。体部内面と口縁部に煤が付着している。火消し壺に利用したものであろう。

丹波焼 85～89で、徳利や瓶・甕である(図22)。SE94出土の丹波焼の破片数の中で施釉率が42%

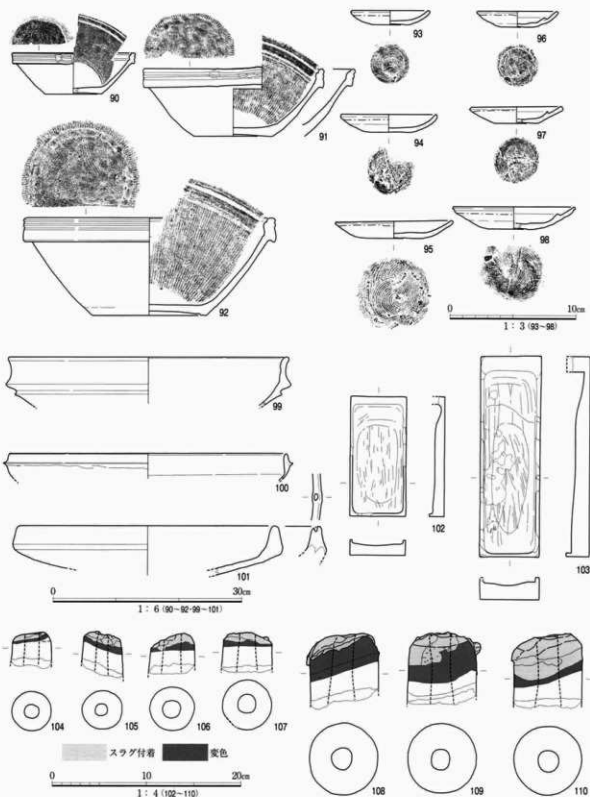


図23 SE94出土埴輪鉢・軟質施釉陶器・土師器・石製品・羽口

と半分近くを占め、徳利も39%を占める。

85は栗皮釉に白泥で字を書きたいいわゆる貧乏徳利である。今回出土の丹波焼の徳利はほとんどがこの種類のものである。86は灰釉の漫瓶と思われる。全形は不明であるが、器壁は薄く内面に付着物がある。87は栗皮釉の小型徳利で、平らな無釉の底部から体部が外に広がり、稜を付けて口縁部に向けてすばまる。短い頸部に外反した口縁部が付く。体部外面の釉の下には密に条線が付けられている。88は中型の施釉甕で、口縁部が肥厚し、上面は水平である。外面は栗皮釉の上から灰釉を流し掛けし、内面は灰釉を掛ける。89は内外面に鉄釉を掛けた甕で、短く立上った頸部にT字状の口縁部が付く。体部上半に条線が施文され、肩の一部に黒色釉が流し掛けされている。

堺播鉢 90～92は堺播鉢で(図23)、大きさは90が38.7cm、91が28.1cm、92が18.3cmである。いずれも口縁部は内面にあった凸帯がやや下がって段になり、底部内面の播目は簡略化したものになっている。90は焼き台の痕跡が顕著で、底部外面はやや高台風に作られている。これらは、白神編年[白神典之1992]のⅡ型式に属するものである。

b. 土器

瓦質土器は破片のみで形の明らかなものがないので、軟質施釉陶器と土師器を併せて報告する。

軟質施釉陶器 93～98で、灯明具である(図23)。

93～95は灯明皿で、93は直径6.1cmの小型皿で、灯明の痕跡がある。94は直径7.5cmの中型で、95は直径9.3cmの大型である。いずれもロクロ成形で柿釉を掛けている。96～98は灯明受皿で直径は6.3cm、7.2cm、9.6cmで、ロクロ成形で柿釉を掛けている。

土師器 皿・焙烙・火入れがあるが、復元不可能な破片が多く、焙烙99～101のみ図化した(図23)。

99の焙烙は難波分類[難波1992]のF類で、外反した口縁部と断面三角形の貼付凸帯を持つ。100はG類で、口縁部は外に開き下端は突出する。底は薄い。101はDb2類で、口縁部の立上りは低く、把手は貫通しない穴を穿っている。焙烙は分類可能な破片が271片であり、その内87%の235片がD類である。F類は16片で6%・G類は20片で7%出土している。

c. 石製品

SE94出土の石製品は硯だけで、102・103を図化した(図23)。ともに粘板岩系の石材を用いている。102は長辺12.6cm、短辺5.8cmの小型の硯で、陸の部分が使用によって凹んでいる。103は長辺21.5cm、短辺6.5cmの長方硯で、陸の部分凹み、墨の痕跡がある。SE94出土の硯は全部で50点で、ほとんどに使用痕が残る。

d. 羽口

104～110は鍛冶の羽口である(図23)。大きさの異なる大型と小型の2つのグループに分けられる。小型の104～107は先端から下方にわずかに広がっている。先端の内径は、小型のものが14.5～17cm、大型の108～110が1.9～2.2cmである。胎土は砂礫を多く含み、色調は橙灰色であるが小型品は橙褐色が強い。大型品は先端を丸く作っているものがある。小型品は先端から3cm、大形は6～7cmあまりで折れている。大きさに規格があり、胎土も似ていることから、大量生産された「羽口屋」の製品であろう[伊藤幸司1992]。調査地周辺で小鍛冶が行われていたと思われる。(宮本)

e. 土製品

土製品は135点出土した(図24・25、表1、図版8)。以下、種類別に土人形、飯事道具、箱庭道具、その他に分類し、それぞれの成形方法、胎土および焼成方法について特徴を記すことにする。

分類の方法は次のように行うが、詳細は[大阪市文化財協会2009]を参照されたい。

①成形方法：型合わせ、型押し、ロクロ、板作りである。型合わせで中の詰まったものを中実、空洞のものを中空とし、底部を作らないものを下方開放とする。穴の大きさは、大：1cm以上、小：串状のもので空けられた5mm未満のものとする。

②胎土および焼成方法：土師質、軟質施釉、陶質、瓦質である。

土人形(34点)

土人形は、モチーフにより人物(14点)と動物(20点)に分類する(図24、表1)。

人物は仏像6点、西行1点、大黒1点、人物の立像・座像6点である。仏像の地藏には立像3点と座像2点がある。人物立像116は中空で中に玉が入っており、鈴である。

成形方法はすべて型合わせで、中実が10点、中空が4点である。穴の大きさは大が5点、小が3点、穴のないものが3点、不明のものが3点である。大板の特徴とされる大きな穴は、仏像が111と他2点の3点、西行114、人物座像118の各1点である。小さい穴のものは、仏像112と人物立像116・117の3点である。地藏立像112は他の地藏立像2点に比べ薄く、底部の穴も小さい。中空のうち人物立像1点は大型で、表面にキラが残る。背面の一部だけの残存であるので確定はできないが、西行の可能性はある。不明とした43点の中に、人物と思われる中空の破片が12点含まれる。

胎土および焼成方法は、軟質施釉の人物立像116の1点を除けばすべて土師質である。土師質で穴の大きな5点は胎土が細かいが、他のものに比べるとざらついた感じである。人物立像116は透明釉に緑彩を施している。胎土が浅黄橙色であるため淡黄色に発色している。仏像の4点には赤い彩色がかすかに残っている。

動物は、牛8点、馬2点、狛犬1点、狐2点、猿1点、鳥1点、亀2点、猫2点、鶏?1点である。牛には撫牛1点、一文牛2点、大型の牛の足5点がある。大型の牛は足や尻部で、その中の3点は同一個体と思われる。撫牛120の額には大黒が配されている。

成形方法は大型の牛の足の1点が手捻りであるが、その他は型合わせである。大型の牛と撫牛、猫、鶏?の5点が中空である以外は、すべて中実である。底部の穴の小さいものは3点、穴のないものは7点で、撫牛120と大型の牛122は器壁が厚く、下方開放である。撫牛の底部の内面には粘土紐を貼付けて厚くし、底部を補強している。一文牛121の腹部には、左右対称に半円形の跡がある(写真2)。詳しくは次章に記載する。



写真2 一文牛121の腹部

胎土および焼成方法は15点が土師質で、大型の牛5点が瓦質である。胎土は一文牛1点と大型牛の足1点は粗いが、全体に細かく緻密である。撫牛120は大型であるが、胎土に

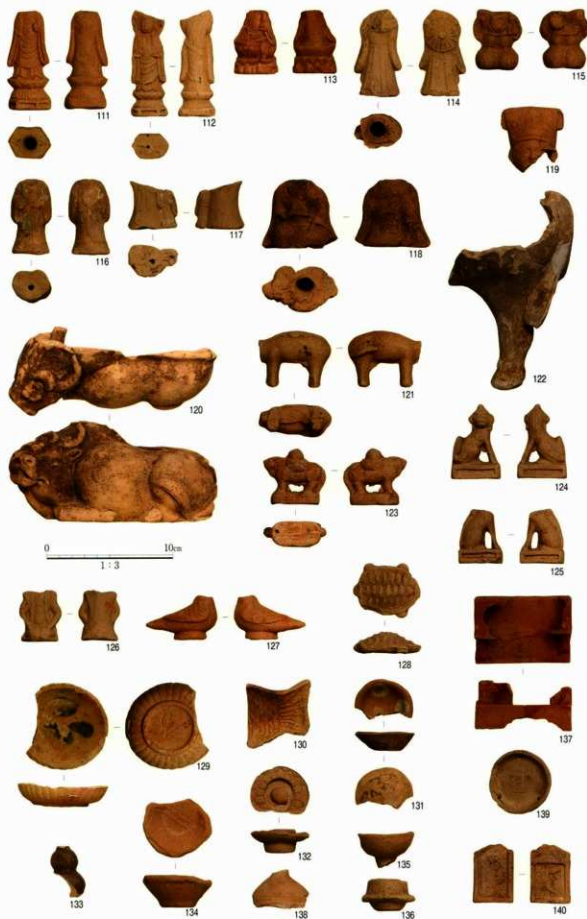


圖24 SE94出土土製品(1)

ごく少量の砂粒が含まれるだけで、緻密である。馬123は、にぶい橙色と橙色の土がマール状になっている。撫牛120は表面が暗赤褐色に彩色され、表面にはハケメが残る。

飯事道具(25点) 飯事道具には、皿5点、鉢1点、蓋1点、盃台1点、壺2点、播鉢1点、漏斗1点、釜1点、甕4点、五鈴鈴? 1点、秤の皿1点、硯4点、ほかに急須の底と思われる破片が2点ある(図24、表1)。皿129の裏面には、「清水」と陰刻がある。鉢131の側面から底部には墨書がある。しかし墨書された上から軸葉が掛けられているため、一部文字が消えている。秤の皿139には「善四郎」の印がある。硯は140の裏面に「下久」、他2点は「人ト」と陽刻がある。胎土は「下久」の方が緻密で、「人ト」の方がやや粗く色調も橙色が強い。

成形方法は、皿1点が口ロ引きで、底部に糸切りの痕跡がある。壺133と急須? は型合わせで、土師質の甕3点が板作りである。それ以外は型押しである。甕137は、下の台と上部の甕の部分の別々に型押しで作り、それらを重ねて仕上げている。釜を載せる穴は型押しで作られた後、くり抜いている。

胎土および焼成方法は、皿3点、蓋1点、鉢1点、甕1点、壺1点、急須? 2点の9点が軟質施釉で、壺133が陶質である。それ以外はすべて土師質である。軟質施釉のものには、胎土が浅黄橙色で軸葉の発色が白色～淡黄色のものには皿129、鉢131、蓋、急須がある。胎土が橙色で、軸葉の発色は赤褐色のものには皿2点と甕137がある。

箱庭道具(17点) 箱庭道具には、家5点、城門2点、天守あるいは石垣2点、神輿2点、舟4点、橋2点がある(図25、表1)。石垣は底部の石垣部分しか残っていないため、上部に天守があったか不明である。舟には3種類あり、中実の屋形船146、人を乗せた舟147と中空のものがある。

成形方法は城門143と神輿145は型合わせで、中実である。型合わせで中空のものには、舟1点と神輿1点がある。神輿145は、底部に大きな穴がある。それ以外は型押しである。屋形船146の底部には、



図25 SE94出土土製品(2)

表1 SE94出土土製品観察表

報告 番号	種別	器種	成形方法	形状	胎土	焼成	胎土の色調	彩色・ 釉薬	穿孔 方法	法 幅	量 厚	高	備考	
111	人物	仏像	地蔵立蔵	型合わせ	中実 細	(タサリ 磨含む)	土師質	橙	胡粉・赤 色	大(1.1)	(3.3)	2.3	(7.8)	
112	人物	仏像	地蔵立蔵	型合わせ	中実 細		土師質	橙	赤色	小(0.2)	(2.9)	1.9	(8.4)	
113	人物	仏像	地蔵座蔵	型合わせ	中実 細		土師質	橙	赤色	なし	(3.4)	2.0	(5.0)	
114	人物	西行	立ち西行	型合わせ	中実 細		土師質	にぶい橙		大(1.2)	3.7	(2.8)	(6.7)	
115	人物	大黒	猿乗り	型合わせ	中実 細		土師質	にぶい橙	胡粉	なし	3.8	2.9	(4.6)	
116	人物	人物立像		型合わせ	中空 細		軟質施釉	浅黄橙	透明(黄) +白・緑	小(0.4)	3.2	2.8	(5.8)	鈴
117	人物	人物立像	小連れ	型合わせ	中実 細	(磨含む)	土師質	にぶい黄橙	胡粉	小(0.4)	(4.0)	2.8	(3.9)	
118	人物	人物座像		型合わせ	中実 細		土師質	橙		大(1.5)	(5.8)	3.6	(5.3)	
119	人物	子供?		型合わせ	中空 細		土師質	橙		不明	4.9	(3.2)	(5.0)	顔のみ残
120	動物	牛	撫牛	型合わせ	中空 細	(磨・タ サリ磨含む)	土師質	にぶい橙	暗赤褐色	下方 開放	(17.5)	(8.8)	8.5	約1/2残
121	動物	牛	一文牛	型合わせ	中実 細		土師質	橙		なし	(5.7)	2.5	(4.3)	頭欠、腹部に半 円形の跡あり
122	動物	牛		型合わせ	中空 細		瓦質	にぶい橙	下方 開放	(11.0)	(6.8)	(17.1)		
123	動物	馬		型合わせ	中実 細	(マブ&状)	土師質	にぶい橙+ 橙		小(0.2)	4.9	2.2	4.3	ほぼ定形
124	動物	狛犬		型合わせ	中実 細		土師質	にぶい橙		小(0.4)	3.9	2.2	5.9	定形
125	動物	狐		型合わせ	中実 細		土師質	にぶい橙		なし	3.4	1.6	(4.3)	頭欠
126	動物	猿		型合わせ	中実 細		土師質	にぶい橙		なし	3.3	2.8	(4.1)	頭欠
127	動物	鳥		型合わせ	中実 細		土師質	橙		なし	(5.6)	2.7	(3.5)	
128	動物	亀		型合わせ	中実 細		土師質	にぶい橙		なし	長(5.3)	幅4.4	1.6	頭・尻尾欠
129	飯事道具	皿		型押し		細	軟質施釉	浅黄橙	透明(黄) +緑	径6.9		1.6	「清水」	
130	飯事道具	皿		型押し		細	土師質	浅黄橙		(5.5)	(5.2)	(1.4)	魚型	
131	飯事道具	鉢		型押し		細	軟質施釉	浅黄橙	透明(黄) +白・緑	径4.6		1.5	側面～底部に墨 書	
132	飯事道具	盃台		型押し		細	土師質	にぶい橙		径4.6		1.8	胴部1/3欠	
133	飯事道具	盃		型合わせ		細	陶質	浅黄橙	褐色	径(2.7)		4.1		
134	飯事道具	深鉢		型押し		細	土師質	橙		径(5.3)		2.4		
135	飯事道具	漏斗		型押し		細	土師質	にぶい橙		(4.2)		(2.7)		
136	飯事道具	釜		型押し		細	土師質	にぶい黄橙		径4.2		2.4	胴部一部欠	
137	飯事道具	甕		型押し		細	軟質施釉	橙	透明(赤)	8.5	奥行 6.1	(4.6)	2穴	
138	飯事道具	五鈴鈴?		型押し		細	土師質	橙		径(4.8)		(3.4)		
139	飯事道具	杯の皿		型押し		細	土師質	にぶい橙		径5.1		1.0	「青四郎」	
140	飯事道具	碗		型押し		細	土師質	にぶい橙		長(4.7)	幅3.2	厚1.2	「下久」	
141	箱庭道具	家		型押し		細	土師質	橙	赤色	(8.4)	奥行 (6.5)	(4.5)	床・壁	
142	箱庭道具	家		型押し		細	土師質	橙		幅6.8	奥行 5.9	(2.9)	屋根	
143	箱庭道具	城門		型合わせ	中実 細	(磨含む)	土師質	浅黄橙		(4.8)	1.7	4.5		
144	箱庭道具	天守? 石垣		型押し		細	土師質	橙		(6.0)	(4.4)	(5.9)		
145	箱庭道具	神輿		型合わせ	中実 細	(タサリ 磨含む)	土師質	橙		大(1.2)	3.0	2.8	4.7	ほぼ定形
146	箱庭道具	舟		型押し		細	土師質	浅黄橙		8.0	3.5	2.6	ほぼ定形	
147	箱庭道具	舟		型押し		細	土師質	橙		(4.7)	4.9	1.6	人物が乗る	
148	箱庭道具	橋		型押し		細	土師質	浅黄橙		(5.5)	4.2	(3.4)		
149	その他	鉄	丁銀	型押し		細	土師質	橙		(4.7)	(3.3)	厚0.9		
150	その他	独楽	花	型押し		細	土師質	にぶい橙		径4.4		1.7		
151	その他	独楽	蛇ノ目	型押し		細	土師質	にぶい黄橙		径3.4		1.2	円盤状	
152	その他	面(圓)		型押し		細	土師質	橙		(2.4)	(3.4)	2.2		
153	その他	泥面子		型押し		細(タサリ 磨含む)	土師質	橙		径5.4		厚1.8	裏面に六角の凹 み有	
154	その他	泥面子		型押し		細	土師質	浅黄橙		径3.9		厚1.3	歳	
155	その他	泥面子		型合わせ		細	土師質	浅黄橙		径3.8		厚1.2		
156	その他	泥面子		型押し		細	土師質	橙		径3.4		厚1.2		
157	その他	泥面子		型押し		細	土師質	にぶい橙		径2.7		厚0.9		
158	その他	泥面子		型押し		細	土師質	橙		径1.6		厚0.4	作り方様	

*彩色・釉薬:(黄)は淡黄色、(赤)は赤褐色に発色のもの

四角い大きな穴がある。

胎土および焼成方法は、すべて土師質である。屋形船、城門、橋は胎土が細かく、色調も他のものに比べると白い。神輿145は胎土がやや粗い。

その他(16点) その他として、銭(丁銀) 3点、独楽4点、面1点、泥面子8点がある(図25、表1)。独楽は2種類あり、底の尖ったもの3点と扁平なものの1点である。面152は人物の顔であり、鼻から下が残存する。泥面子は模様により、家紋7点、文字1点に分類できる。家紋の153は六角形で、裏面も六角形に浅く凹ませている。泥面子は型合わせが2点、型押しが6点である。(川村)

3) 近代前半

i) 第3c層上面の遺構・遺物

I区東部に、地山が北から南へ約0.8m下る段差があり、落ちの肩付近に分布していた整地層(第3b層)を除去後、低い側で連結する東西方向の溝SD157・163~165、南北方向の溝SD126・274を検出

した(図26、図版5)。これらの溝機能時の地表面は削平されていたが、SD163の北側で作土化された暗褐色シルト偽礫を含む粗粒砂~礫質シルト層(第3c層)が部分的に遺存していた。

SD157はか SD157は段の下端で検出した東西方向の溝で、幅0.3m、深さ0.1mあり、埋土は水つきのシルト層(図27-3層)である。長さは14m確認し、西側への続きは現代の擾乱のため不明であるが、検出した西端付近の北側斜面で南北方向の細い溝SD274と連結していた。東側は南北方向のSD126と連結する。連結部分で地山の段も北へ折れ曲がり、後述するSD74と重複するため確認できなかったが、再度東側へ曲がっていたようである。SD126以東には、0.5m間隔で並ぶ東西溝SD163~165が連結していた。SD163~165の規模はそれぞれ幅0.3m、深さ0.1m未満であり、埋土はSD126・157と同じである。溝に伴

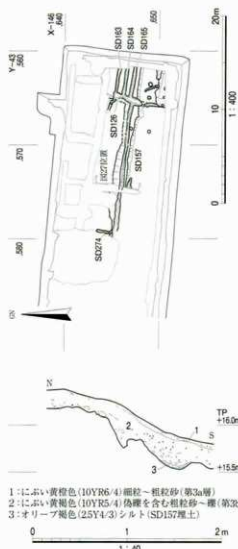


図27 SD157断面図

図26 第3c層上面の遺構

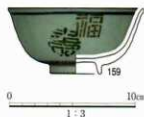


図28 SD157出土遺物

うとみられる作土(第3c層)がSD163東側に分布していたことから、これらは畠畝間の名残と考えられ、本来はSD165以南にも分布していたであろう。このことから、SD126・157は畠に取付く水路であったと考えられる。なお、南北溝SD126西北端の斜面には、小規模な東西溝がこれに取付いていた。

SD157からは、磁器端反碗159が出土した(図28)。ほぼ完形で、体部外面に「福寿」の型紙摺が見られる。瀬戸美濃産である。後述する第3a層上面で検出したSD74からも、同形・同文様の個体が出土しており、明治中頃のものであろう。

ii) 第3a層上面の遺構・遺物

第3a層は1区西南部の低い場所に分布する近代の遺物を含む作土層で、本層上面で畠を検出した。また、1区北半の高い場所では、この畠の灌漑水路とみられるSD74・77・159・191を検出した(図29、図版5)。

a. 水路・畠

SD74ほか SD74は1区北半で検出した東西溝で、SD77・159・191はこれから分岐し、南側の畠域へ延びる溝で、畠の灌漑水路であろう。SD74は幅1.0m前後あり、調査区内で約46m確認した。溝底の高さは場所によって異なるが、おおむね西が高く東が低い。検出面からの深さは東端で1.0mあるのに対し、西端では

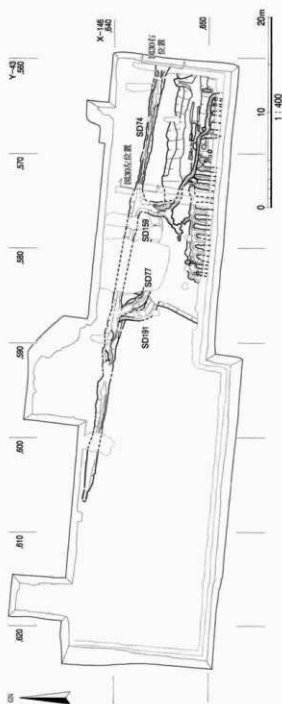


図29 第3a層上面の遺構

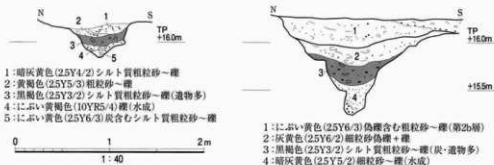


図30 SD74断面図

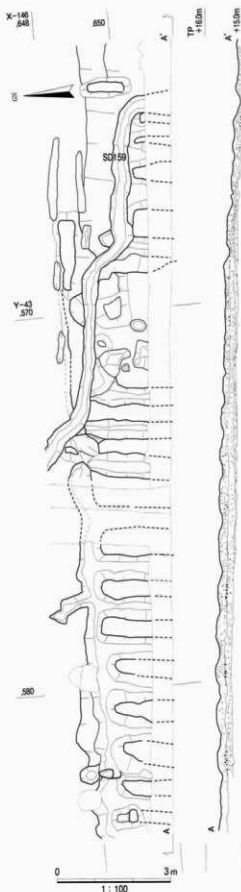


図31 第3a層上面高平・断面図

0.1mと浅く、以西では検出できなかった。溝の西側は、第2a層の長屋建物造成時に削平されたと考えられる。また、SD159との連結部分から東で溝底が急に深くなっていた。埋土は、底付近に水成起源の砂礫層が、その上に遺物を多く含む黒褐色シルト質粗粒砂～礫層が堆積し、最終的に第2b層に相当する地層で埋められていた(図30)。

SD77・191は1区中央で重複し、SD74から分岐して東南側へ延びる溝で、SD191が古くSD77が新しい。幅はともに1.0m前後ある。低い場所にある畝へ水を送るための水路と考えられるが、東南側への続きは不明瞭であった。

SD159はSD77よりも約10m東側でSD74と分岐して南へ延びる溝で、段の下端で東南側と西南側へ二股に分かれていた。西南側の溝は途中で途切れてはっきりしないが、東南側の溝は畝の北端に取付き、東端で南側に折曲がっていた。SD74との連結部分では幅が1.5mあるが、二股に分かれてからは幅0.5mと細くなる。

畝 1区東南部の低い場所で南北方向に畝を立てた畝を検出した(図31)。第2b層で覆われており、上面が良好に遺存していた。東西幅約19mあり、調査区外南側に広がっている。畝の範囲内には幅4.0mの畝間のない平坦な場所があり、それ以东には東に低くなりながら畝が4条、以西にはほぼ同じ高さで畝が11条並ぶ。畝・畝間の幅はともに0.5m前後で、畝と畝間の高低差は0.1mある。畝の作土は灰色細粒～粗粒砂質シルトからなり(第3a層)、層厚は最大0.2mある。下半は偽礫が目立つが、上半は攪拌が進み偽礫はほとんど確認できない。また、畝間部分の表層は畝と比べてやや泥質で、雨水などにより細粒物質が畝間に堆積したとみられる。東半の畝の外周には上述した溝SD159が巡り、西半は北端で畝間が連結していた。

b. SD74ほか出土遺物

SD74東半とこれに取付くSD77・191・159から、土器・陶磁器類がまとまって出土した。溝の廃絶に伴い、一括

で投棄されたものと考えられ、磁器を中心に160～214を図化した(図32～35)。

SD74から出土した磁器は160～182がある(図32)。160～163は碗の蓋である。160・161は端反碗の蓋で、文様は呉須による手描である。160は内面に「寿」の文字が書かれている。162は手描で内外面に網目文が施され、つまみ内に角銘がある。163は型紙摺で鹿子文が施される。164～166は端反碗で、164・165は呉須による手描で染付されている。164は底部内面に崩れた環状松竹梅文が、165は「寿」の文字が描かれている。166は器高が低く、体部に「福寿」の型紙摺が見られる。167～171は平碗で、外面の文様は手描のものが多く、型紙摺は170のみである。内面の文様は、167・170が型紙摺、169が手描による。171は高台内に角銘がある。172～176は小型の端反碗である。172は外面に手描の染色体文、底部内面には「一三」と書かれている。173は内外面の文様が手描で、174・175は線画のみ、176が色絵である。172・174・175は口縁端部に口紅が施されている。また、173・174は高台が厚く蛇ノ目状である。177・178は小型の丸碗で、177は外面が手描による染付、178が色絵である。179は色絵の仏飯器、180・181は青磁染付の湯呑である。180は外面上半に銅版摺による染付、181は上絵染付で草花が描かれている。182は上面に銅版摺により「本舗東京資・福原衛生・」と書かれており、1888(明治21)年に発売された日本初の練歯磨「福原衛生歯磨石鹸」の蓋である。以上のうち、瀬戸美濃焼と判断できるものは160・162～164・166・168・171～178・180～182で、肥前磁器は165・167・174・177と少なく、残りは産地を特定することができない。

SD159から出土した磁器は、185・191・192・196・199がある(図33)。185は碗の蓋で、文様は手描で、つまみ内に角銘がある。191・192は平碗で、ともに文様は型紙摺による。196は縦長の小杯で、外面の文様は銅版摺による。199は湯呑で、外面の文様は銅版摺による。192は産地が特定できないが、それ以外は瀬戸美濃焼とみられる。

SD191から出土した磁器は、183・184・187～190・193・195・197・198がある(図33)。183・184は碗の蓋である。183は呉須により手描で染付された端反碗の蓋で、つまみ内に角銘がある。184は内外面の文様が型紙摺による。187～190・193・195は碗である。187～190・193は平碗で、187・193が手描、188～190が型紙摺で染付される。193は高台内に角銘がある。195は小型の端反碗で、外面に型紙摺により染色体文が染付される。197・198は縦長の小杯である。197は青磁で、鶴が上絵付により施され、口縁部下には「千年晴雲峰」と書かれている。高台内には「駒造」銘がある。198の文様は手描による。184・187・189・193・195・197・198が瀬戸美濃焼、183は肥前磁器で、それ以外は産地が特定できない。

SD77から出土した磁器は、186・194・200～203がある(図33)。194は色絵の小型丸碗である。200～203は小皿である。200～202はいずれも型紙摺と手描を併用しており、201・202は体部外面に文字が書かれている。201は高台内に角銘がある。203は木型打込皿で、底部内面に獅子と草花・刻印を刻み、その上に呉須で染付している。いずれも瀬戸美濃焼とみられる。

以上、上記の遺構から出土した磁器は、一部呉須も見られるが大半が酸化コバルトを用いており、碗などには手描染付が多く、型紙摺も一定量含まれる。湯呑や蓋には銅版摺の技法も用いられている。大正期に流行する器形のものを含まないことから、銅版摺を用いた製品が美濃で焼かれる1886(明治

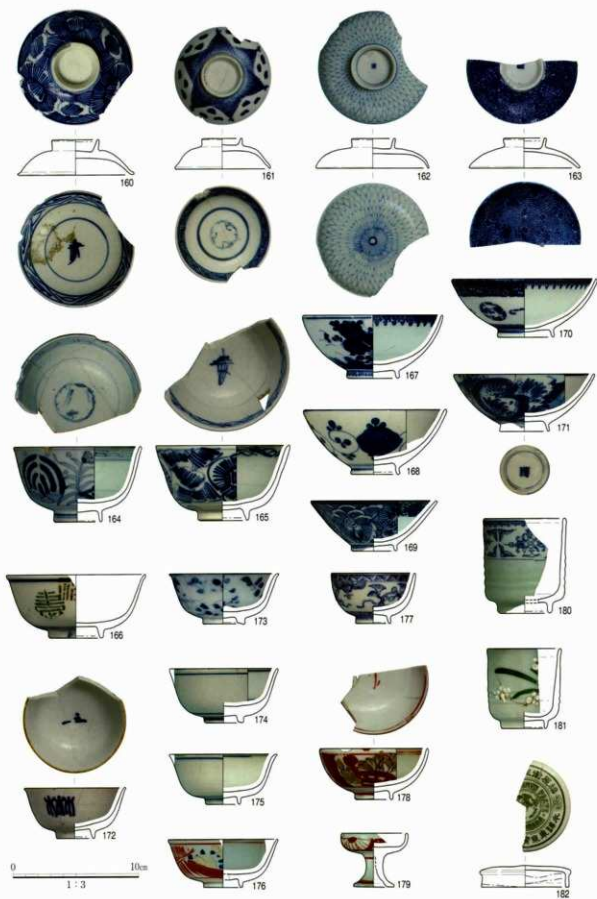


图32 SD74出土磁器



图33 SD77·159·191出土磁器

SD77(186·194·200~203)、SD159(185·191·192·196·199)、SD191(183·184·187~190·193·195·197·198)

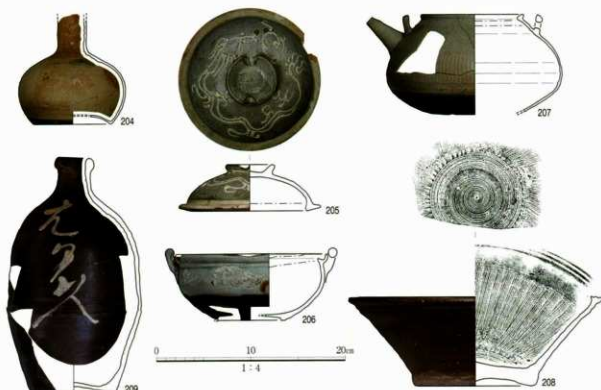


図34 SD74・191出土陶器
SD74(205・206・208・209)、SD191(204・207)

19)年以降、型紙摺が廃れる1900(明治33)年頃までの明治中頃～後半に製作・使用されたものと考えられる[成瀬晃司2001、山下峰司2008]。明治21年発売の「福原衛生歯磨石鹸」の蓋が含まれることもこの年代観と矛盾しない。

陶器は、SD74出土の205・206・208・209、SD191出土の204・207を図化した(図34)。

204～207は関西系陶器である。204は体部が丸味を帯び、頸がすくまる瓶で、外面には透明釉が掛けられ、肩部には草文が描かれている。207は注口を持つ土瓶で、体部外面にはトビカンナにより文様が施され、その上に緑灰色の釉が掛けられる。底部は無釉で、煤が付着している。206は鍋で、205はその蓋である。206は器壁が薄く、内面の体部から底部にかけて透明釉を掛け、外面は緑色の釉を掛け、白釉によって文様を施す。底部外面は無釉で、煤が付着している。205の外面も206と同様である。図化していないが、SD74からは同タイプで釉色の異なる鍋が多数出土しており、当時の基本的な煮炊具であったと考えられる。

208・209は丹波焼である。208は搦鉢で、外面には栗皮釉が掛けられ、表面は光沢がある。209は徳利で、底部以外の全体に栗皮釉が掛けられ、外面には白泥により文字が書かれている。

その他、厨房具として、SD74出土の210・212～214、SD77出土の211を図化した(図35)。

210は土師質の炉あるいは涼炉である。体部には窓があり、外縁には指頭圧痕による装飾が巡る。胎土中に微細な雲母粒が多く含まれる特徴がある。211は土師質の円筒形焔炉である。口縁部は一方が半円状に挟られており、その下の体部下半には楕円形の窓がある。内面は中位に横方向の突帯が巡り、上半には支え用の突起を三方に貼付けている。突起部分の下にはいずれも器面に櫛歯が刻まれて

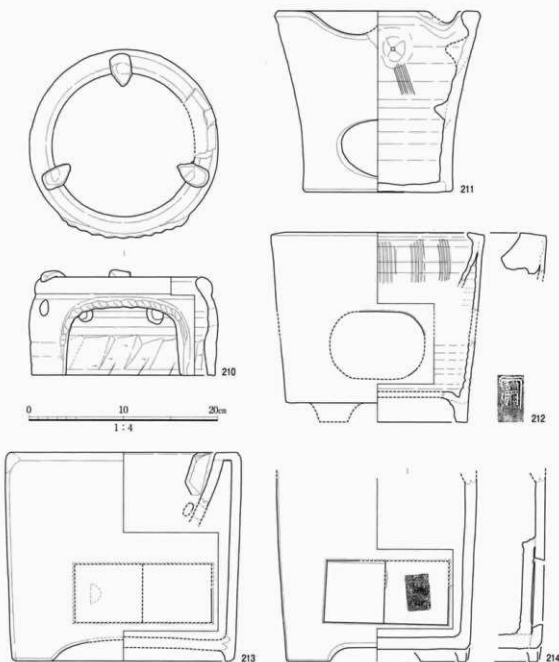


図35 SD74・77出土土厨器具
SD74(210・212~214)、SD77(211)

おり、突起を接着しやすくするためのものであろうか。212は軟質施釉の円筒形焜炉で、姫路の弥七焜炉と呼ばれる煎茶焜炉である[小出匡子2000]。外面は柿色の彩色を施したのち透明釉が掛けられ、体部下半には楕円形の窓が開けられている。別個体ではあるが、第2a層から蓋とみられる部品が出土しており、窓には蓋が付いていたようである。脚部外面には「合請 弥」の刻印がある。213・214は土師質の箱形焜炉で、三河の高浜焼と呼ばれるものである。一辺25cm前後の213と20cm前後の214がある。表面はヘラミガキにより光沢があり、硬質である。体部下半を横長方形に開け、213は半分を内側から粘土板を当てて塞いでいる。残存しないが戸が付いていたとみられ、切込みの上下端を内傾させ、内側の粘土板とで固定していた。214の粘土板の外面には、「第十五号 新川名産株式会社製」の刻

印がある。高浜焼箱形焼炉は、明治・大正期に首都圏を中心に流通し、1891(明治24)年には角コンロ製造名産組合が結成されており[小林謙一1991]、そのころには生産されていたようである。

4) 近代後半

1区の第2a層上面で、2列に並ぶ東西に細長い長屋建物を検出した(図36・37、図版6)。調査区内のほぼ全域で検出した北半の長屋に面した北側には東西通路がある。建物範囲内の地表面は被熱により赤色化しており、炭が分布する箇所もあった。地山内に落下した焼夷弾を複数箇所で確認しており、

これらの建物は米軍爆撃機による1945(昭和20)年の大阪大空襲で焼失したものとみられる。聞き取り調査でも、6月15日の空襲で被災・焼失したことが判明した。ちなみに、この長屋建物は、1928(昭和3)年撮影の航空写真でも確認でき(図版1)、聞き取り調査から大正の初め頃に建てられたようである(註5)。

第2a層上面は、長屋建物が分布する範囲と、その西側の1区西端とで約1mの段差があり、西端は第2b層を盛って一段高い平坦面が造成されている(図10)。航空写真による判読と聞き取り調査によって、調査区外西側の南北道路に面した一戸建の借家が存在したことが判っている。ただし、重機掘削時に東側と同レベルまで掘削してしまい、平面で遺構を確認することができなかった。

さらに、第2b・3層が分布しない範囲では、第2a層を掘削中、あるいは地山(第5層)上で、近代の遺物を含む遺構を多数検出した。井戸や竈もあるが、大多数がゴミ穴と考えられる土坑である。長屋の裏庭部分に密集する土坑は、位置関係から長屋に伴うと考えられるが、長屋建物の礎石掘形に切られる遺構は前項で報告した第3a～3c層の時期の可能性がある。層位関係が明確でなく、また出土遺物の年代観からも区別できないため報告を省略し、図36で示すにとどめる。長屋建物より先行する可能性のあるこれらの遺構は、1区でも西半に偏っており、調



図36 第2a層上面・下面の遺構

査範囲一帯が宅地造成される以前、西側の南北道路に面して建物が存在していた可能性がある。なお、2～5区で検出した近代の遺構も報告を省略する。

以下、通路と長屋建物を構成する各施設、出土遺物について個別に報告する。

i) 通路

1区中央北半の拡張部分で検出した、幅2.0mの東西通路である(図37、図版7)(註6)。北半1.3mの範囲には砂利が、南半の約0.7mの範囲には瓦の破片が縦方向に敷詰められ、路面が舗装されていた。南半には煉瓦積みの会所があり、通路下に埋められた東西方向の土管と連結していた。通路の両側には幅0.7m前後、深さ0.1m未満の浅い側溝 SD38・39があり、南側側溝のSD38は通路側の会所と土管で連結していた。また、SD38の南肩には長屋建物の礎石が並んでおり、北側側溝SD39以北は北側に向かって高くなっている。1区西北端では削平のため確認出来なかったが、東北端では、瓦を敷いて舗装した通路の続きを検出した。

ii) 長屋建物の間取り

調査で検出した長屋建物は、礎石の配置から、南北11.0m、東西6.0mで、2.0m間隔で東西に並んでいた。礎石は抜取られ遺存していない箇所もあるが、基本的に約

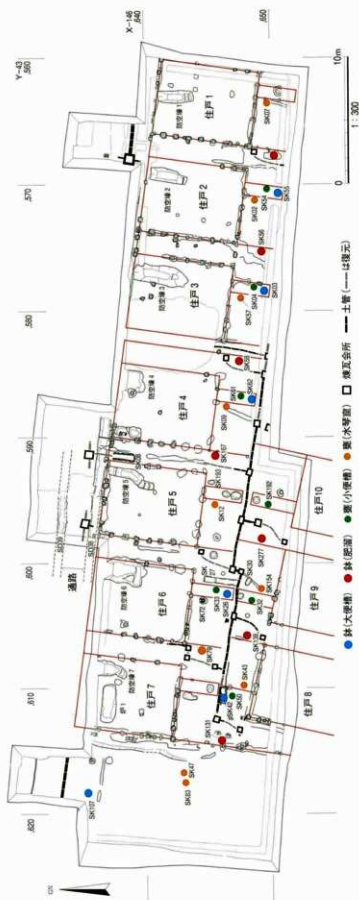


図37 長屋建物の配置

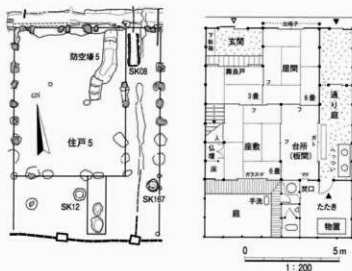


図38 住戸5(左)と間取り復元案(右)

がややずれている。

上部構造を復元できる情報は少ないが、住戸5建物北辺の西北隅から東側1.0m～2.5m間に礎石が存在しない空間があり、玄関部分であろう。また、住戸2・3・5・6の通り庭部分の北から3mには、隣接する建物の礎石に接して別の礎石が1個あり、通り庭内部を区画する扉があったと考えられる。

住戸4～7と住戸8～10の間に埋設された東西方向の下水管が長屋の敷地境で、ここから建物までの南北約3mの範囲が裏庭と考えられることから、長屋の裏に路地はなく、塀をはさんで南北長屋の裏庭が接していたことになる。また、裏庭には建物側から便所が延びている。

以上の調査知見と聞き取り調査の結果をもとに、建物の間取りを近代長屋建築の専門家である和田康由氏に復元していただいたものが図38である。

1戸の敷地は東西7.75m (3.75間)、南北約11m (5.5間)で、玄関から見て左側に南北の通り庭があり、裏庭に続いている。屋内の間取りは手前に玄関と接した3畳分の空間と6畳の居間、奥に6畳の座敷と3畳の台所があり、台所に接した通り庭は土間としてへっつい(竈)が設置されていたと復元した。聞き取り調査では1階に仏間を伴う座敷があり、長屋は2階建てであったことが判明している。また、各戸には便所・風呂があり、これらは裏庭に設置されていた。通り庭の奥は風呂の焚口、汲取りや物置に利用された空間であろう。

この復元は一案であり、実際の間取りは各戸で微妙に異なっていたようである。建物内部にも礎石や礎石の抜取り穴があるが、各戸で共通する規則的な配置を見出すことはできない。また通り庭には、住戸5・6でそれぞれ洗い場とみられる側辺に瓦を立て中を漆喰で固めた施設(SK08・27)が存在するが、竈など炊事に関連する遺構・遺物は検出できなかった。

iii) 衛生施設

長屋に伴う衛生施設は、下水管・会所および便槽・水琴窟がある(図37)。

下水管・会所 通路の南端と南北の長屋の敷地境に、陶製の土管を用いた下水管が東西方向に埋設されていた。その途中に設定された煉瓦組みの会所から各戸に向かって南北方向の下水管が延び、通

1m間隔で据えられており、場所によってはさらに密集していた。

建物間の南北に細長い空間が通り庭、建物奥の下水管までの範囲が裏庭であろう。これらで構成される北側の住戸を住戸1～7、南側を住戸8～10と呼称する。このうち、住戸3・4の間隔が他より1.0m広いことから、ここを境に東西が別棟の長屋であったと考えられ、住戸4～7のように4戸で1棟の長屋建物を構成していたとみられる。また、北側と南側の長屋は方向

り庭の奥に設けられた会所と連結していた。土管は直径10cm、20cm、25cmの大小3種類がある。直径20・25cmの大・中型品は通路南端と裏庭の東西方向の下水管に、直径10cmの小型品はこれと連結する南北方向の下水管にそれぞれ用いられていた。土管の連結方向から、各住戸から出た生活排水や雨水を集め、大型の土管によって東から西へ流していたことがわかる。なお、会所に用いられた煉瓦については、後述する。

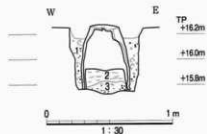
便槽・水琴窟 各住戸の奥には、便所と関連する大型の甕および鉢が埋設されていた。建物側から見て左手に奥から正置した鉢、甕、倒置した甕の順で並んでいる(図版7)。前2者には内面に便槽に特徴的な白色物質が付着しており、規模から鉢が大使用、甕が小使用の便槽であろう。また、手前の倒置した甕の底には中央に円孔が穿たれており、手洗い水を受ける排水施設とみられる。SK154のように、利用された甕は地面に穴を掘って直置きされており、甕内部下半には泥が溜まっていた(図39)。水が落ちる際の音響効果を意図したとは思えないが、ここでは甕を用いていることから水琴窟と呼称する。水琴窟SK07・09・154からは下水管の方向に浅い溝が延びていた。住戸6の裏庭では、同じ位置に瓦質の土管を立て周囲を瓦や礫で固定した円形土壇(SK72)があり(写真3)、同様の排水施設であろう。

一部の住戸では便槽が検出されなかったが、想定される位置に大型の土壇があることから、廃絶後に抜取られたのであろう。大便・小使用便槽、水琴窟と建物との位置関係は各住戸とも一定している。また、住戸1の水琴窟(SK07)と小使用便槽の抜き取り穴の間、住戸3の小使用便槽(SK04)と大使用便槽(SK03)の東側では、それぞれ南北方向に並ぶ小型の礎石を2個検出した。これを基に、幅1.0m、長さ約3.0mの板張りの便所が建物から延び、奥に大使用、手前に小使用便所、通路際の裏庭に手洗い場があったと復元できる。また、聞き取り調査によれば、各戸には風呂場があったとされ、小使用便所に隣接した建物までの空間を風呂場と復元した。ただし、調査では風呂場の存在をうかがわせる遺構・遺物は得られなかった。

これらとは別に、各住戸の通り庭奥の空間には、内面に白色物質が付着した大型の鉢が1点ずつ埋められていた。隣接する住戸との境に接するという共通点があり、異なる時期の便槽ではなく、前述した便所と同時存在したと考えられる。便槽の内容物が一杯になった際に一時的に溜め置くための肥溜と考えておきたい。

なお、住戸7の西側には大使用の鉢を埋めたSK107と小使用の甕を埋めたSK83・47が離れて存在するが、これは長屋建物の東側にあった一戸建建物に伴うものであろう。

小便槽と水琴窟に用いられた大甕、大便槽に用いられた大鉢はいずれも大谷焼で、代表的なものを図示した(図40)。



1:灰色(5Y4/1)角礫含む粗粒～極粗粒砂
2:黒褐色(2.5Y3/1)粘土
3:黄灰色(2.5Y4/1)角礫含む粗粒～極粗粒砂

図39 SK154断面図



写真3 SK72検出状況

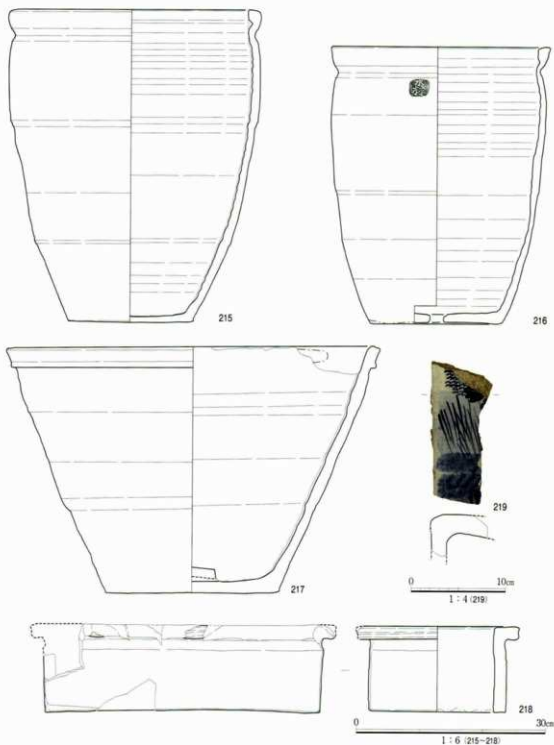


図40 便所・水琴窟関連遺物
SK54(215)、SK43(216)、SK58(217)、SK26(218)、防空壕7(219)

215は小便槽SK54に用いられた甕で、器高49.7cm、口径39.6cmあり、内面にのみ鉄軸を掛けている。口縁部を玉縁状に肥厚させており、体部の上段と下段に粘土継ぎ目がある。底部外面には墨書がある。

216は水琴窟SK43に用いられた甕で、器高44.0cm、口径34.8cmあり、底部外面以外にテカリのある鉄軸を掛けている。口縁部は断面台形で、体部の中位に粘土継ぎ目がある。外面の肩部に「森」銘の刻

印がある。森室は幕末から明治末期まで操業されたとされる〔豊田瓊庵1969〕。刻印が確認できたのはこの個体のみである。217は大便秘槽SK58に用いられた鉢で、器高57.0cm、口径39.6cmあり、底部外面以外にテカリのある鉄釉を掛けている。口縁部の形状は断面台形で、体部に粘土継ぎ目が3段残る。

便槽内とその周辺から便器が出土したものは一部に限られ、大半の便器は木製であった可能性がある。SK33からは洋式の小便器、SK42からは洋式の大便秘器、SK26・32からは和式の大便秘器がそれぞれ出土した。SK32出土の大便秘器は緑色釉の掛かった瀬戸美濃焼の磁器で、SK26出土の大便秘器218(図40)は陶器製で、白色釉が掛かり、外面に貫入が顕著に見られる。このほか、防空壕7からは、和式大便秘器の破片219(図40)が出土しており、上端の折返し部分上面には染付による装飾が施されている。

iv) 防空壕

住戸1～7内の北端で防空壕1～7を検出した(図37・41)。防空壕1は建物中央に位置するが、それ以外は東辺に沿った位置にある。南北に細長く、多くは南辺斜面が階段状に加工されており、侵入口は南側であろう。建物間取りの復元では居間に相当する場所であり、畳を上げて中に入出入りしたの

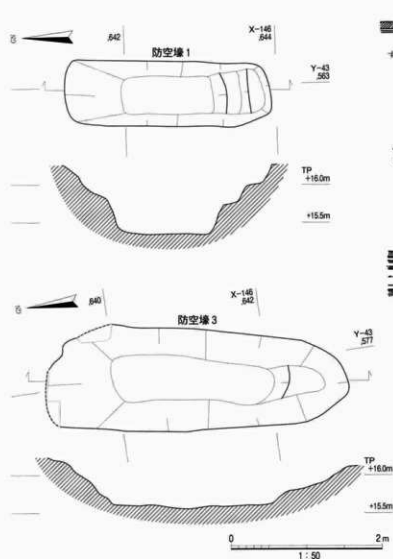


図41 防空壕1・3平・断面図

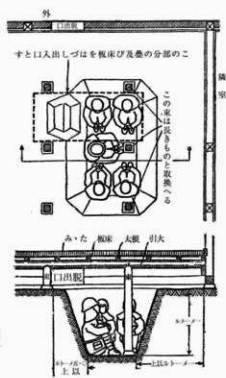


図42 「時局防空必携」(1943年)に記された防空壕模式図



写真4 防空壕5(東北から)

であろう。深さは0.9～1.1mとほぼ共通し、平面規模は若干の差異がある。規模の大きい防空壕3は上端の幅1.2m、長さ4.0m、下端の幅0.6m、長さ2.1mあり、やや規模が小さい防空壕1は上端の幅0.9m、長さ2.7m、下端の幅0.5m、長さ1.2mの規模である。大型の防空壕3は大人が一列にしゃがんで5人、小型の防空壕1は3人入ることが出来、防空壕2・5も後者の規模である(写真4)。

1943(昭和18)年7月21日発行の「時局防空必携」[情報局1943]には待避所(防空壕)を作る際の注意事項が記されており、万一の場合の被害拡大を避けるため1箇所は5人程度にし、なるべく分散して造ることが指導されている。示された模式図(図42)も、検出したものと近い。

v) その他の遺構・遺物

炉1 住戸7の建物内西北端で検出した竪穴式の炉である(図43)。平面は東西2.3m、南北0.8～0.9mの東西に長細い楕円形で、深さは0.7mある。竪穴内の西半に煉瓦を組んで表面に粘土を張った箱形

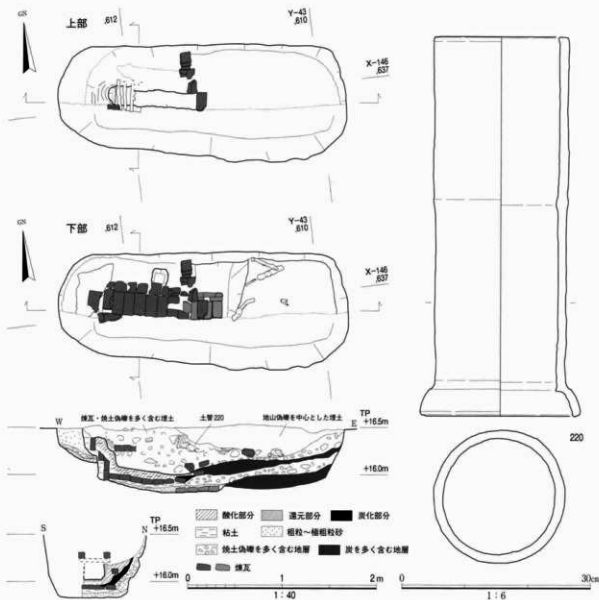


図43 炉1平・断面図および出土土管

の東西に長い炉を構築し、上には鉄棒を渡していた。炉の壁面近くは還元化、内側は酸化しており、高熱を受けたことがわかる。ここに風を送り、鉄棒の上に燃料を置いて燃焼させたのであろう。炉の上部構造は遺存しておらず、廃絶後の埋土西半には構築材の一部とみられる煉瓦片や焼土の偽礫が多く含まれていた。ここから備前焼の土管220が出土し(図43)、内面が煤けていることから、炉の煙突に使用されたものと考えられる。また、堅穴内東半には焼土と炭が互層で厚く堆積しており、作業空間であるとともに、炉からかき出されたものを溜め置いたとみられる。また、炉は一度作り直されており、下層に古い炉に伴う酸化・還元層が見られた。

層序関係や配置から、この炉は長屋建物に伴うもので、長屋の西端の住戸7で高熱を必要とした何らかの生産・加工が行われたようであるが、聞き取り調査では何の作業を行っていたのかは判らなかった。

SK30 住戸9の裏庭部分で検出した小型の土壙で(図37)、中から磁器製の化粧瓶が大量に出土した。化粧瓶は3タイプあり、221が8点、222が59点、223が3点出土した(図44)。それぞれ底に「レート」「LAIT」と書かれており、221・222のタイプには文字の無いものも存在する。1909(明治42)年に平尾賛平商店から発売された「レートクレム」である。瓶の底には統制番号の付いたものが無いことから、1941(昭和16)年以前のものであると考えられる。同一製品が大量に出土したことから、日常生活で使用したものではなく、住人がこれに関わる内職を行っていた可能性がある。

SK193 住戸5の裏庭部分で検出した浅い土壙で(図37)、中から瓦質の炬燵224が出土した(図44)。

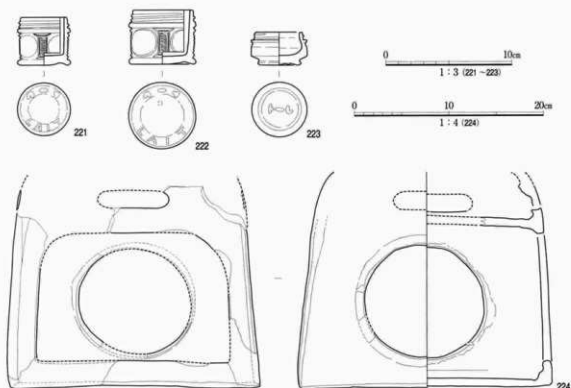


図44 SK30・193出土遺物
SK30(221~223)、SK193(224)

灰を詰めた火入れを中に入れて使用したもので、体部の1面には取出し用の大きな窓が開いている。他の3面には円形の窓があり、また、各面の上部中央には把手孔がくり抜かれている。(大庭)

vi) 煉瓦

本調査地点では、建物の一部、側溝、会所などに多数の普通煉瓦(以下、単に煉瓦と記す)が使用されていた。煉瓦の幅年には、寸法、色調、刻印、表面の仕上状態など、多様な観点が必要であるが、このうち本調査地点において年代を考える上で最も有効であると思われる刻印について、社印とその他の印に大別して報告する。

刻印煉瓦102点を調査し、A～Nに分類した(図45)。このうち、A～Hは社印、I～Nはその他の印と考えられるものである。刻印はすべて煉瓦の平の面に押されていた。なお、社印の特定については特記のない場合、[水野信太郎2001]によった。

社印 Aは岸和田煉瓦株式会社(以下、岸煉)で、A1・2(大型の印)29点とA3・4(小型の印)21点、他の符号や漢字を伴うA5・6各1点からなる。岸煉は1872(明治5)年に山岡尹方が岸和田に創業し、1887(明治20)年に第一煉瓦株式会社、1893(同26)年に岸和田煉瓦株式会社とするなど、たびたび改組・社名変更してきたが、社印は一貫して「×」を用いている。A6の刻印は、同志社ジェームズ館(1914(大正3)年竣工)、旧下関英国領事館(1906(明治39)年竣工)、禁野本町遺跡[大阪府文化財センター2006]などで使用され、おおむね明治後半から大正初年に使用例が多い。なお、Aは社印を2つ重ねているもの(A2・4)が多い。Bは大阪窯業株式会社(1885(明治18)年煉瓦製造開始)の社印で10点確認された。AとBは大阪市内における煉瓦のシェアで上位を占める2社であったが、Aが52点、Bが10点という割合は、今後幅年を考える上で1つの指標となる可能性があろう。Cは、大阪市内では大阪市立工芸高等学校(1924(大正13)年竣工)などで使用が確認できる[大阪歴史博物館2006]が、社名は不詳である。Dは堺煉瓦株式会社(1893(明治26)年創業)と推定されているが、詳らかでない。大阪市内およびその周辺で見つかることが多く、OS05-1次調査でも確認された。Eは日本煉瓦株式会社(1896(明治29)年頃創業)の社印と推定されるが、詳らかでない。大阪市内およびその周辺で確認されることが多く、周囲の「四弁花」が社印を表し、その中に責任印の数字を表現しているようである(注7)。大阪市内阿倍野区帝塚山の奥大原霊園煉瓦塀の煉瓦(大阪歴史博物館蔵、部門番号:建340)などの実例がある。Fは製造者が明らかでない。Gは貝塚煉瓦株式会社の社印と考えられる。同社は1894(明治27)年に創業し、1907(同40)年に大阪窯業株式会社に吸収されたことから、この時期の製造と考えられる。Hは社印と考えられるが、詳細は不明でありその他に分類される可能性もある。堺環濠都市遺跡(SKT772地点)で類似のものが報告されている[堺市教育委員会2001]。また、アサヒビール吹田工場(1891(明治24)年竣工)の刻印煉瓦の1つにも同種のものが見られる[舞鶴市赤れんが博物館1993]。

その他の印 社印以外の刻印は、数字やカタカナ、その他の符号によって、製造した職人や工場を表現すると考えられる。社印と併用されることもあれば、単独で用いられることもある。I～Nの中にも社印に相当するものが含まれているかもしれないが、ここではこれまでの報告で社印に該当しない単純な符号を紹介する。

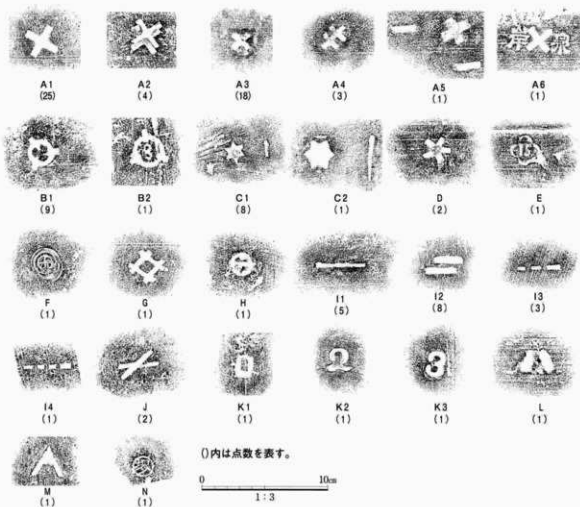


図45 出土煉瓦刻印

その他の印ではIが多く、棒形が1～4本組み合わせられたものである。Jは棒形が交差するが、岸煉の社印(2本の棒が90度に交差する「×」印)とは異なる。Kは算用数字、Lは漢字の「八」またはカタカナの「ハ」と考えられる。Mは「A」の文字にも見えるが、明らかではない。Nは近世の塀で生産された瓦に用いられた検印の一種に類似する(註8)。幕末・明治期の煉瓦製造者の中には屋根瓦の製造から転向した者もあり、時代的には明治時代の半ばころまでの比較的古い煉瓦である可能性も考えられる。

刻印のうち、遺跡の年代を考える参考になるものとしては、明治後半から大正初年に多いA6、明治27～40年と考えられるGが挙げられる。一般に、昭和に入ってからでも煉瓦は使用され続け、他の建設現場での余剰在庫が転用されることも考えられることから、煉瓦刻印だけから一定の時代に絞ることは困難である。また、大規模な公共建築と異なり、長屋では小口の煉瓦取り引きが時間差を伴って行われた可能性が大きい。時代的な推測をより困難なものとしている。しかし、全般的にみれば、長屋の建てられた大正初年頃と考えられる煉瓦があり、中には明治中～後期の煉瓦も含まれている可能性があるといえよう。

(酒井)

註)

- (1) この報告で使用する関西系陶器は、19世紀に各地で磁器が焼かれ、土と技術が移動し、同じような器種・器形のものが各地で作られ始めたので、丹波焼や、京・信楽系陶器と特定できるもの以外の関西で作られた陶器を総称して関西系陶器とした。
- (2) 産地別の分類を行ったが、これらの遺物の作られた時期はそれまでは肥前でしか作られなかった磁器が瀬戸・美濃はじめ各地に広がって、多くの地域で作られ始めるころに当る。また陶器もその技術が各地に伝播して、よく似た陶器が異なった産地で作られていて、産地を確定することが難しい陶磁器も出土している。こうした状況で現在わかる範囲で行った分類である。将来異なった産地に分類されるものもある可能性があることをお断りしたい。
- (3) SE94出土の軟質施釉土器の器種をみると土師器と共通する灯明具と焔炉である。他の陶磁器とは異なり釉薬も透明釉を土師質の胎土に掛けているだけであることから、陶磁器ではなく、土器の範囲に入れて分類するのが良いと考えた。
- (4) 瀬戸市教育委員会1991「古瀬戸小西遺跡」pp.32-33の記述による。
- (5) 検出した長屋の家主は、調査地北側の敷地に主屋があった澤井家で、当時ここに居住されていた豊田郁子氏(旧姓澤井氏、東大阪市在住)から、長屋に関する当時の状況をご教示いただいた。
- (6) 1909(明治42)年に公布された「大阪府建築取締規則」では、「道路」を公有・私有を問わず、公衆の交通に供する土地、「通路」を裏屋の交通に供する土地と定義しており、検出した遺構もこれに倣って「通路」と呼称する[大阪府建築士会1988]。
- (7) 大阪市中央公会堂(大正7年竣工)の工事仕様書には、同社煉瓦は大阪商業株式会社製とあるが、保存修理工事の際には同社刻印のある普通煉瓦は報告されていない。筆者が実見した範囲では、保存再生工事後、地階展示室に再利用された煉瓦にDの刻印があったことから、Dは大阪商業株式会社と連携関係にあった可能性が考えられる。
- (8) 吹田市立博物館・藤原孝氏のご教示による。

第三章 遺構と遺物の検出

第1節 SE94出土遺物について

1) 土器・陶磁器について

SE94出土陶磁器の産地別特徴をみると次のようになる(図46)。

土器・陶磁器の破片数の36%あまりを占める肥前磁器では、碗が一番多く、46%を占める。碗の中でも端反碗、広東碗、ハの字高台の碗が約15%ある。

萩焼にはピラ掛けのものはなく、ピラ掛けの出現以前の可能性が高い。

京・信楽系陶器では鉄釉の両手鍋と行平の割合が約3:2で、行平が一定程度普及していることがわかる。灯明関係の皿や灯明受皿が京・信楽系陶器の約1/3を占め、土師器の灯明皿が非常に少なくなっている。

瀬戸美濃焼は磁器が9点出土し、陶器には19世紀前半頃の碗がある。

丹波焼は白泥で字を書いた徳利が190片余り出土し、徳利の主流を占めている。

堺播鉢は播鉢全体の中の76%を占める。

以上の特徴は大阪市内の19世紀後半の出土の状況とは異なっており[積山洋1994・佐藤隆2000]、19世紀初頭の大坂城跡NW07-3次SK03資料[大阪市文化財協会2009]よりは後出の要素があるので、SE94の埋まった時期は19世紀の前半頃になると思われる。

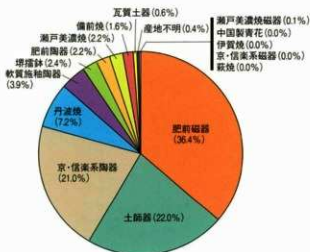


図46 SE94出土土器・陶磁器組成

2) 陶磁器と石製品からみた調査地の住人について

肥前磁器碗の中に同じ文様の蓋付碗が数セットある。これは調査地の住人が数人分の会席膳を持っていたことを示す。調査地が城代屋敷の一角に位置することから、それらが武家の食卓を飾っていた可能性が高いと思われる。



写真5 SE94出土土・水筒

また硯と水滴が数多く出土している。水滴は肥前磁器の方形のものが大きさ・形とも異なって87点、京・信楽系陶器で15点、備前焼も1点の破片が出土した。合わせると100点を超す多さである。硯も図化した2点を含め50点出土した。このことから調査地周辺で文房具を商う店があった可能性もあるが、同じ規格のものがほとんどなく、硯には使用痕の明瞭なものが多いことから、個人のもので約100人分の文房具があった可能性が高い。硯は1点を除き長方硯で、女性用や携帯用に使われる小形のものはない。水滴は肥前磁器の方形のもの90%近くを占め、規格性が高い一般的なものである。

今回の調査地のことを伺った豊田郁子氏のお話では、戦前にこの付近におられた高名な書道家に教えを受けていた人々は、硯などを各自の棚に置いていたとのことである。出土した文房具があまり持ち主を推測できるような特殊なものでなく、一般的なものであることから、江戸時代にも武家屋敷内の一面に子弟のための勉学の空間があった可能性が推測された。(宮本)

3) 土製品について

今回出土した土製品の特徴は以下のとおりである。

- 1、土人形は34点中、小型が27点に対し大型が7点で、5分の1である。また中空のものは中実の22点に対し7点である。
- 2、人物で民間信仰に係わるモチーフは仏像、大黒、西行で、人物全体の半数を超える。
- 3、動物では牛のモチーフが3種類あり、大型は瓦質である。
- 4、大阪市内出土の甕は土師質で板作りのものが多く、軟質施釉の甕は類例が少ない。
- 5、泥面子は出土しているが、芥子面子は1点も出土していない。
- 6、胎土のやや粗いものは、底部に大きな穴が空けられているものが多い。

また、今回出土の資料と、これまで報告した18世紀後半から19世紀のごく初めの資料[大阪市文化財協会2009]と比較してみると、手捻りの人形や土鈴、鳩笛が1点もないこと、銭(丁銀)や独楽、泥面子が少ないながら出土していることがあげられる。

以上のことから、中実で小型のものが多くことは前述の調査と同様の傾向を示す。しかし、19世紀に出現してくる面子類が前述の調査で出土していないが、今回の調査では少ないが出土していること



写真6 「下久」の陽刻
(左：硯140裏面、右：NW93-4次出土土灯明具底部(ともに原寸))



写真7 皿129の裏面(原寸)

から少し時代が下ると考えられ、陶磁器から検討された19世紀前半に比定できる。

さらに今回の出土資料で、特筆すべきものが何点見つかった。

まず1点目は、一文牛121である。これまで大阪市内で出土している18世紀後半から19世紀にかけての一文牛には、腹部に大きな穴のあるものが多い。121の牛も、モチーフや大きさはそれらと同じであるが、穴が空いていない。しかし写真2のように腹部に半円形の跡が左右対称にある。本来なら左右の型に粘土を詰め、腹部に棒状のものを差し込んで型を合わせ、型から抜き取ったと考えられる。半円形の跡は棒状のものを差し込まずに作られたため、穴が空かずに跡だけが残ったものと考えられる。このことから牛の腹部の穴は、型から抜いた後に空けるのではなく、型に粘土を詰める時に空けることがわかった。

2点目は、硯140の裏面の「下久」の陽刻である(写真6左)。これは、NW93-4次調査出土の灯明具の底部にも同じ「下久」の陽刻のあるものが2点出土している(写真6右)。「下久」は屋号であるのか、製作者の名前なのか、ブランド名であるのかはわからないが、どちらも胎土が緻密で、丁寧な作りである。この3点では断言できないが、飯事道具はミニチュア製品を専門に作られたものだけではなく、灯明具などと一緒に製作されていた可能性が考えられる。

3点目は軟質施釉の皿129である(写真7)。裏面に「清水」と陰刻されているが、胎土はやや粗く器壁も厚いことから、京都の清水で作られたものではなく、ブランドを意識したものではないかと思われる。

最後に、SE94出土の土器・陶磁器類と土製品との組成比率をあげておく(図47)。SE94出土の土器・陶磁器類と土製品の総数は、7,373点で、土師器は、1,641点で22%、陶磁器は5,597点で76%、土製品は135点で2%を占める(註1)。前述の調査の結果[大阪市文化財協会2009]と比較すると、土師器の割合が大きく減少するのに対し、土製品の割合はあまり変わらないことがわかった。参考

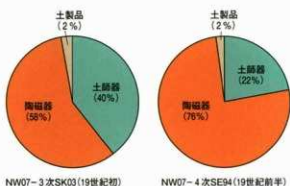


図47 土器・陶磁器類と土製品の組成

までに同時期の京都市の平安京左京北辺四坊出土資料(公家町の土壌B687)と比較すると、土製品の占める割合はほぼ同じである[能芝勉2008]。

今回は出土量が少なかったが、製作技法がわかる資料や業種の推定ができるような資料が見つかった。今後、資料の増加を待って検討を加えたい。

(川村)

(註)

(1)この統計で使用する土師器は、土師器と瓦質土器を合わせた数値である。

第2節 調査地周辺の近世から近代の様相

1) 土地利用の変遷

図48は、調査地周辺の近世から近代にかけての推移をよく示す絵図・地図・写真を並べたものである。①は1863(文久3)年の「国宝大阪全図」、②は1890(明治23)年の大阪都市地図、③は1928(昭和3)年の航空写真の一部である(註1)。以下、図48の変遷に沿って、調査成果を位置づけてみたい。

図48①の1863(文久3)年の絵図によると、四周を通りに囲まれた広大な敷地が御城代屋敷と記されており、西側の街区内にも武家屋敷として描かれている。通りに面した外周には町屋が表現され、城代屋敷の北・東・南辺は庶民の住む町屋と考えられる。また、1745(延享2)年の「大坂御家中屋敷割図」では、城代屋敷西側の南北通り沿いには小規模な武家屋敷街が描かれている[大阪大学総合学術博物館・大阪歴史博物館2008]。調査地が隣接する西側の南北道路は、町屋が排除された城代屋敷の表通りであろう。この場所は、1691(元禄4)年の「新撰増補大坂大絵図」では「追手門城代土岐伊予守家中」と記されており[大阪都市協会1980]、少なくとも17世紀末以降、幕末までこのような街区が継続していたとみられる。

調査地は城代屋敷地内の西側の南北通りに面した位置にある。調査の結果、近世の生活面は大きく削平されており、城代屋敷内部の具体的な状況を把握することはできなかった。検出した遺構は井戸などの深く掘られたものに限り、出土遺物の年代観から、SK71が17世紀、SE187・241・48が18世紀、SE94が19世紀前半に埋没したと考えられる。SK76、SE225・102・122は豊臣期に遡る可能性もある。また、1区南端の傾斜面は南側へ下がるように雛壇状に整形されており、18世紀代に埋められたことが判明した。

出土遺物の中には、当地が武家地であったことを伺わせる陶磁器類も散見される。SE48から出土した18世紀前半～中頃の肥前磁器色絵碗9は、内外全面に細かい装飾が施された高級食器といえるものである。また、SE94からは19世紀前半代に投棄されたとみられる大量の陶磁器・土器類が出土し、同じ文様の蓋付碗が複数セット出土していることから、武家の食卓を飾った会席膳の可能性もある。同時に、大量の硯や水滴が出土しており、付近に武家の子弟が勉強するための施設が存在した可能性もある(本章第1節)。

図48②の1890(明治23)年の地図では、かつての城代屋敷地が畠地になり、四周の道沿いには近世以来の町屋が存続している。明治維新後、武士階級が大阪から姿を消し、城代屋敷跡は広大な空閑地として残された。このような都市の空洞化は明治半ばまで放置されていたようである。近代になると、旧城内の武家屋敷街の多くは軍用地として接収されたが、この場所は対象外とされた。城内でも外縁部に位置する上、傾斜地に立地することから、軍用地には適さなかったであろう。

調査では第3a層上面および第3c層上面で畠を検出した。第3a層上面の畠に伴う水路からは明治の後半に使用・廃棄されたと考えられる大量の陶磁器類が出土しており、②の地図の状況と対応する。調査では十分に検討できなかったが、西側の南北道路沿いは宅地化されていた可能性もある。

①1863(文久3)年
国宝大阪全国
(大阪歴史博物館蔵)



②1890(明治23)年
大阪都市地図



③1928(昭和3)年
撮影航空写真
(大阪市計画調整局蔵)



図48 調査地周辺の近世から近代の様子(黒・白枠は今回の調査地)

図48③の1928(昭和3)年の航空写真では、それまでの空閑地内に住宅地が密集しており、この間に大きな変化が起きている。一帯の宅地化は、聞き取り調査によれば大正の初め頃とされ、澤井家と小山家が敷地一帯を購入し、借家を建てたとのことである。第2a層上面で検出した長屋建物はこの時に建てられたもので、航空写真にも写っている。家主は澤井家で、澤井家の母屋は調査地の北側に存在していた。

大正から昭和初期にかけて、大阪の産業は飛躍的に発展し、市内の人口は驚異的に増加していった。1925(大正14)年には、第二次市域拡張によって「大大阪」と称されるようになる。人口の増加に伴い庶民住宅も大量に建設された。当時の住宅総数に占める借家の比率は約9割にのぼることから、この間に建設された住宅の大半が借家であったといえる〔寺内信・和田康由1989〕、大阪の近代長屋は急激な都市発展を支えた受皿の役割を果たした。旧城代屋敷地が再開発され、宅地化されたのも、このような近代大阪の産業発展と人口増加を反映したものであろう。

裏通りはこのような借家街として開発されていったが、道路に面した表通りは近世以来の町屋が継続し、さまざまな商店や印刷屋、軍需品の卸商が軒を連ね、下町風情がそのまま残っていたという〔福田紀一1986〕。

1945年6月15日、米軍のB29爆撃機による空襲で長屋は焼失する。大阪では第4回目のこの大空襲は、大阪・尼崎市街地への昼間焼夷弾攻撃で、大阪の被災戸は53,112戸、死者477人と記録されている〔新修大阪市史編纂委員会1994〕。聞き取り調査によると、6月1日の空襲(第2次大阪大空襲)で付近に大きな被害が出たことから、長屋の住人はその後すぐに疎開し、6月15日の空襲の際には空家の状態であったという。

空襲に伴う焼土・瓦礫の整地層(第1層)の上では、畠を検出した。戦後の焼け野原を臨時の畠とし、食糧を確保したのであろう。当地に府営住宅が建設され、戦後復興が進められるのはその3年後、1948年である。

2) 長屋建物について

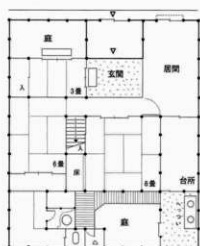
第2a層上面で検出した長屋建物は、4戸で1棟の長屋を構成しており、1戸の敷地は間口が東西7.75m(3.75間)、奥行が約11m(5.5間)ある。2階建て、建物の横には通り庭があり、裏庭には風呂・便所が延びている(図49①)。

建物の築造年代は、上述したように大正の初め頃とされたが、①宅地化に伴う整地層(第2b層)に覆われた溝出土陶磁器類が明治後半のものである点、②長屋の水琴窟に用いられた大谷焼甕の刻印から、これが明治末年までに製作されたものである点、③長屋の会所等に使用された煉瓦の刻印から、明治後半から大正初年頃に製作されたものが多い点、という調査知見とも矛盾しない。

ただし、1909(明治42)年に公布された「大阪府建築取締規則」では、通路の幅を9尺以上とすることが定められているが〔大阪府建築士会1988〕、実際検出した通路は幅が約6尺5寸(2.0m)と規定を満たしていない。これは、1886(明治19)年に公布された「大阪府長屋建築取締規則」で通路の広さを6尺以上とする規定に則ったと思われ、宅地化の開始が規則の施行以前に遡る可能性もある。



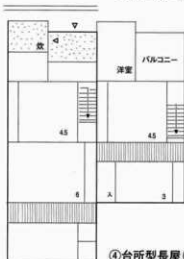
①検出した長屋の間取り復元(左:1階、右:2階)



②調査地西側の一戸建借家間取り復元(1階)



③通庭型長屋(三軒家地区、間口2.25間)



④台所型長屋(天王寺地区、間口2.25間)

0 5m
1:200

①~②は聞き取り調査をもとにした、
和田康由氏による復元

③~④は〔和田2003〕より作成

図49 近代長屋・借家の諸例

大阪の近代長屋の建築的特徴について、〔和田康由2003〕では以下のような諸類型に整理されている。まず、道路と玄関の関係では、前庭を設けない「直接型」、前庭を設ける「生垣型」・「門塀型」がある。また平面形態では、表から裏まで庭に通じている「通庭型」、玄関脇に土間の炊事場を設けた「台所型」、間口いっぱい開放して土間とした「店舗型」や玄関脇に洋室を設けた「洋室型」などがある(図49③・④)。「直接型」は近世以来の伝統的な型式で、基盤整備のない無秩序な市街地(スプロール地区)に多く見られる。これに対し、「生垣型」・「門塀型」は1919(大正8)年の都市計画法により施行された土地区画整理地区を特徴づける型式とされる。また、「通庭型」は近世の表長屋と共通し、近代にはスプロール地区に多く見られ、「台所型」は大正になって登場する新しい型式とされる。「台所型」はもともと前面に土間を配置した裏長屋の型式で、1909(明治42)年の大阪府建築取締規則で長屋棟間に三尺の間隔をとることが定められ、これを便所汲取りのサービス用通路として利用できるようになったことから、通り庭を設けるの必要がなくなり、表長屋にも普及してきたものとされる〔寺内・和田1989〕。

今回検出した長屋は、道路と玄関の関係では前庭を設けない「直接型」に、平面形態では通り庭を設ける「通庭型」にそれぞれ該当する。大正期以降に普及する型式ではなく、明治以来の大阪の伝統的長

屋といえる。

今回検出した長屋の大きな特徴として、1戸の間取りが広いことが指摘できる。[和田2003]で示された実地調査のデータによれば、スプロール地区・整理地区ともに間口2間の長屋が最も多く、全体の約半数を占める。2.5間までの規模のものは全体の90%以上で、間口3.5m以上のものはスプロール地区で0.5%、整理地区で1.3%に過ぎない。新市域に比べて旧市域の借家の方が規模が大きい傾向にあるが[寺内・和田1989]、この点を考慮しても今回検出した長屋の広さは際立っている。明治期に多く建てられた安普請の不良住宅とは一線を画すものであろう。聞き取り調査では、周辺には一戸建や平屋など様々な形式・規模の借家が混在していたようであるが、検出した長屋は通常より家賃が高く、住人の多くは学校の教師など、俸給生活者を中心とした比較的裕福な階層であったという。

またこの長屋は、西側の南北道路に面した一戸建の借家の間取りを基本に設計され、その2/3程度の規模であったことを伺った。この借家は門塀を設け、裏庭だけでなく前庭もある立派なつくりで、1階部分に中廊下を設けるという特徴がある(図49②)。毎朝馬が迎えに来るような大佐・中佐クラスの軍人一家が住んでいたとされ、高級借家といえよう。[和田2003]の分類では、和風の門や塀を設けて邸宅風に加工した「門塀型」に分類される。昭和の初め頃には、この借家を建築業者がしばしば見学に来ていたそうで、当時の建築業界では評判の借家であったようである。

聞き取り調査によれば、この借家街の1角には、借家のメンテナンスを専門に行う大工を住まわせていたという。当時としては珍しく快適な住宅環境が提供されていたといえる。1戸建の借家に採用された「門塀型」も、ゆとりのある新しい住環境を演出する外観として、以後の土地区画整理地区で普及するものである。上記のような借家がその後の区画整理事業でのモデルの一つになった可能性もある。



龍造寺町に残る明治43年に建てられた長屋で、間口が2.25間と一般的な規模である。

写真8 付近に残る近代長屋

る。上記のような借家の諸特徴には、多分に家主の意向が反映していたとみられるが、旧武家屋敷地の再開発で、以後に取組まれる住環境の整備が先取りしてなされていたことは興味深い。

1945年の大空襲で、大阪市内の近世・近代の建築は壊滅的な被害を受け、当時の風情を残す近代長屋も一部に残っているだけである(写真8)。すでに地上から消え、記憶も薄れかかっている庶民の住まいや暮らしぶりを復元し、都市史の中で位置づける作業は、発掘調査と考古学によるアプローチも有効である。(大庭)

註)

(1) 図48および図版1の航空写真については、大阪市役所計画調整局計画部の許可を得て、使用した。

第IV章 まとめ

今回の調査成果を、時代毎にまとめる。

古代以前 調査地北半に前期難波宮の回廊が存在することが期待されたが、設定した2～5区のいずれでも後世の削平を受け、残存していなかった。調査地東端に設定した3区では、地層の遺存状況が比較的良好であったにも関わらず、想定される位置で柱跡を確認することができなかった。東隣のNW04-2次調査8トレンチの知見と合わせて考えると、この部分の回廊は複廊ではなく塀へ変化していたことが予想される。また今回柱穴が検出できなかった点については、隣接する柱の深さが一定しておらず、削平されていた可能性と、この部分では柱間隔が広がっていた可能性が考えられる。回廊の構造については、今後の周辺調査でさらに確認・検討する必要がある。

なお、3区では埋土の特徴から、古墳時代後期に遡る可能性のある柱穴を1基検出した。東側には南北方向の古い谷の存在が想定され、この周囲には古代およびそれ以前の遺構が遺存している可能性が高い。また、後世の遺構・地層からではあるが、後期難波宮に伴う重圓文軒平・軒丸瓦、唐草文軒平瓦が出土している。

近世 調査地は、豊臣後期には三ノ丸推定範囲内、徳川期には城代屋敷地に当るが、後世の削平のため当時の生活面は残存しておらず、具体的な状況を把握することはできなかった。検出された遺構は、落込み・井戸・土壌がある。このうち、SK76、SE225・102・122は豊臣期に遡る可能性があり、SK76からは金箔押軒丸瓦が出土している。また、徳川期の遺構は、SE71(17世紀)、SE187・241・48(18世紀)、SE94(19世紀前半)など各時期のものがある。1区南端で検出したSX191は南側へ下がる竈壇状の段の一部の可能性があり、18世紀代に埋められていた。調査地西南側のNW86-2次調査で確認された西から東へ落ちる段と連続するような区画が調査地南側に存在していた可能性がある。

なお、SE94からは陶磁器・土器・石製品・土製品などの遺物が多量に出土し、陶磁器の年代観からこれらは19世紀前半代に一括廃棄されたものと考えられる。近年の大坂城跡の調査(NW07-3次)では、18世紀後半から19世紀初頭にかけての陶磁器・土器・土製品などの一括資料が得られており[大阪市文化財協会2009]、これとの比較により、19世紀前半代の陶磁器・土器・土製品の様相を明らかにすることができた(第三章第1節)。

近代 調査地域は近代になって大きく様変わりする。第3a・3c層上面では畠およびこれに取付く水路を、第2a層上面では長屋建物を検出した。時期は、前者が明治中頃～後半、後者が大正初頃～昭和の前半と考えられる。近世までの城代屋敷地が近代になって空閑地となり、都市の空洞化が明治の後半まで放置されていたが、大阪の産業発展と人口増加に伴う再開発で宅地化されたと理解できる(第三章第2節)。

第2a層上面で検出した長屋建物は、1945年6月15日の第4次大阪大空襲で被災・焼失したもので

ある。各戸内には防空壕が掘られており、戦時中の市内のようすを垣間見ることができる。検出した長屋については、建築学の分野で研究が進んでいる大阪の近代長屋の変遷史の中で位置づけを行った。この長屋は通り庭を有する明治の典型的な型式で、間口が市内の通有の長屋に比べて格段に広い点が特徴である。聞き取り調査では借家の住人は比較的富裕な階層であったようである。大正以降、大阪では土地区画整理事業などを通じて秩序だった街路の編成と住宅環境の改善が図られていくが、当地の借家はこのような住環境の整備を先取りしていたと評価できる(第Ⅲ章第2節)。

さらに、この長屋に使用された煉瓦の刻印を分析し、市内の煉瓦流通や編年を考えるための基礎資料を得ることができた。(大庭)

引用・参考文献

- 伊藤幸司1992、「近世遺構出土の埴塼と羽口」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.401-406
- 大阪市教育委員会2003、『重要文化財大阪市中央公会堂保存・再生工事報告書』
- 大阪市文化財協会1981、『難波宮跡研究調査年報1975～1979.6』
- 1995、『難波宮址の研究』第十
- 2004、『難波宮址の研究』第十二
- 2005、『府営寺山住宅における難波宮跡遺跡試掘調査(NW04-2)報告書』
- 2009、『大坂城跡』X
- 大阪大学総合学術博物館・大阪歴史博物館2008、『大阪大学総合博物館叢書3 城下町大坂』大阪大学出版会
- 大阪都市協会1980、『大阪古地図集成』
- 大阪府建築士会1988、『建築のルール・大阪100年の歩み』
- 大阪府文化財センター2002、『麻田藩陣屋跡』、pp.102
- 2006、『禁野本町遺跡』
- 大阪歴史博物館2006、『特別展図録 煉瓦のまち タイルのまち』
- 岡本良一1970、『大坂城』岩波書店
- 大橋康二1988、『18世紀における肥前磁器の銘款について』：『青山考古』第6号、pp.67-74
- 2005、『型打ち成形』：『古伊万里の見方』九州陶磁文化館、pp.14-16
- 岸和田市2005、『岸和田市史』第4巻
- 京都市埋蔵文化財研究所2004、『平安京左京北辺四坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）
- 小出匡子2000、『一弥七堤姫一』：『伊丹郷町通信』第3号 伊丹郷町研究会、pp.15
- 小林謙一1991、『江戸における近世瓦質・土師質埴塼について』：『江戸在地系土器の研究Ⅰ』江戸在地系土器研究会、pp.1-46
- 堺市教育委員会2001、『堺市文化財調査概要報告』第95冊
- 佐藤隆2000、『実年代資料 大坂』：『近世の実年代資料』第12回関西近世考古学研究会大会発表資料
- 情報局1943、『時局防空必携』：『通報』353号
- 白神典之1992、『埴塼鉢考』：『東洋陶磁』vol.19 東洋陶磁学会、pp.3-103
- 新修大阪市史編纂委員会1994、『新修大阪市史』第7巻
- 積山洋1994、『消費地報告大坂』：『近世陶磁器の諸様相—消費地における18・19世紀の器種構成—』第6回関西近世考古学研究会大会発表資料
- 瀬戸市教育委員会1991、『古瀬戸小西遺跡』
- 趙哲済1995、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.41-44
- 寺井誠2004、『難波宮成立期における土地開発』：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十二、pp.161-170
- 寺内信・和田康由1989、『都市居住の新しい形態』：大阪市都市住宅史編集委員会編『まちに住まう 大阪都市住宅史』、pp.331-348
- 豊田軀庵1969、『阿波の焼物 大谷焼』

- 難波宮址顕彰会1969、「第32次発掘調査概要」：『昭和43年度（第31次・第32次・第33次）難波宮跡発掘調査報告書』、pp.4-7
- 成瀬見司2001、『陶磁器』：『図説江戸考古学研究辞典』 柏書房、pp.272-273
- 難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の地層」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.373-400
- 能芝勉2008、「京城 江戸時代の土製品」：『関西近世考古学研究16 土人形が見た近世社会』 関西近世考古学研究会、pp.17-27
- 畑中英二2003、『信楽焼の考古学的研究』 サンライズ出版
- 福田紀一1986、「内久一町会の界限」：『久友会三十五年のあゆみ』 久友会、pp.1-13
- 松尾信裕1994、「豊臣期大坂城の規模と構造-発掘調査から推定される豊臣期大坂城三ノ丸の範囲」：『大阪市文化財論集』、pp.291-330
- 水野信太郎監修1993、『赤れんが物語』 舞鶴市赤れんが博物館
- 水野信太郎1999、『日本煉瓦史の研究』 法政大学出版会
- 2001、「国内煉瓦刻印集成」：『産業遺産研究』第8号 中部産業遺産研究会
- 山下峰司2008、「Ⅲ 瀬戸・美濃“近代陶磁”の諸問題」：瀬戸市文化振興財団編『東京・小田原出土の近代陶磁-瀬戸・美濃窯の近代2』、pp.48-52
- 李陽浩2005、「前期・後期難波宮の中軸線と建物方位について」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十三、pp.86-96
- 和田康由2003、「大阪の近代長屋について」：『大阪市住まいのミュージアム研究紀要・館報』第1号、pp.19-30

あ　と　が　き

当該地一帯は、昭和54年に実施された住居表示により上町一丁目に改称したために、明治以来親しまれてきた寺山の町名は消え、建替えを待つ府営住宅も上町住宅となり、寺山公園にその名を残すのみとなった。

その寺山公園ではこの時期、発掘作業を行っていた昨年も、報告書の入稿が迫った今年も、大相撲の桐山部屋が春場所に向けて土俵をつくり、ぶつかり稽古の音を響かせている。

今回の発掘調査地は、難波宮跡の東南域に当り、以前の試掘調査でも確認されたように宮殿の南限ラインが敷地内を通っている。西隣地の市立髙野学校で見つかった回廊がどの位置から一本柱塀に変わるのかなど、まだ解明すべき点は多いが、西から東へ落ちていく地形の変化に沿って難波宮の南を限る施設がつくられていたという事実はしだいに掴めてきたように思われる。今後、東方での発掘調査によって明らかにしていきたい。

当地は豊臣期には大坂城三ノ丸の推定範囲に含まれる。調査では井戸や土塋といった生活の痕跡が認められ、金箔押瓦など重要な遺物も出土している。また、こうした近世遺構の検出面では近代の長屋の痕跡も残されていた。簡素とは言え、水琴窟のある裏庭の風景、そして防空壕が戦災で焼けただれた状況は、消えつつある大阪の面影や戦争の悲惨さを物語っていた。

当地では府営住宅の建替えが行われ、人々の営みはこれからも続いていく。今後も、関係の皆様のご理解とご協力を得て、原史以来の歴史の記録を進めてまいりたいと願っている。

(趙 哲済)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

T TK43型式……………13
 い 一文牛……………28,53
 お 大谷焼……………43,56
 か 回廊……………3,4,6,10,11,59
 型紙摺……………16,18,33,35,38
 広東碗……………18,51
 き 京・信楽系陶器……………8,13,14,18,22,50~52
 均整唐草文軒平瓦……………13
 金箔押軒丸瓦……………14,59
 こ 後期難波宮……………5,10,12,59
 炬燵……………47
 コンニャク印判……………13,16,18,22
 さ 堺掘鉢……………18,27,51
 三ノ丸……………1,4,5,59
 し 重圓文軒平瓦……………13
 重圓文軒丸瓦……………13
 城代屋敷……………1,51,54,56,59
 す 水琴窟……………42~44,56
 須恵器……………5,12,13
 朱雀門……………3,4,6,10~12
 硯……………27,30,31,52~54

せ 瀬戸美濃焼……………8,16,18,24,35,45,51
 前期難波宮……………3~6,10,11,59
 た 高浜焼……………39,40
 丹波焼……………16,18,26,27,38,50,51
 つ 通路……………40~43,50,56,57
 と 銅版摺……………35
 な 長屋……………7,34,40~43,47,
 49,50,56~60
 軟質施釉陶器……………18,27
 は 羽口……………18,27
 土師器……………5,16,18,27,50,51,53
 端反碗……………22,24,33,35,51
 畚……………5,7,8,33,34,54,56,59
 ひ 肥前磁器……………8,13,14,16,18,35,51,52
 54
 肥前陶器……………16,22
 備前焼……………14,16,18,24,47,52
 ほ 防空壕……………45,46,60
 や 弥七提灯……………39
 れ 煉瓦……………7,41~43,46~50,56,60
 お 大坂城跡……………2,5,46,54,58
 な 難波宮跡……………1,5,58

**Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume XI

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Prefectural Apartmenthouse

March 2009

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SX: Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Background and Progress of Research	1
S.1 Environment of the Site	1
S.2 Preceding Investigations of Surrounding Areas	3
S.3 Background and Progress of Reserch	6
Chapter II Investigation Results	7
S.1 General Local Stratigraphy	7
1) Stratigraphy in the Research Area	7
2) A Small Fault	9
S.2 Features and Artifacts	10
1) Ancient Period (6~8century).....	10
2) Early Modern Period (17~19century).....	13
3) First Half of the Modern Period (19century).....	32
4) Latter Half of the Modern Period (20century).....	40
Chapter III Examination of excavated features and remains	51
S.1 Remains Unearthed from SE94	51
1) Pottery and Ceramics	51
2) Inferences about the Occupants of the Site from Ceramic and Stone Artifacts	51
3) Earthenware Artifacts	52
S.2 Interpreting the Early Modern and Modern Periods from the Investigation Area	54
1) Changes in Land Use	54
2) Row House Buildings	56
Chapter IV Conclusion	59
References and Bibliography	61
Postscript	
English Contents	

報告書抄録

ふりがな	おおさかじょうあと 11							
書名	大坂城跡XI							
編著者名	大庭重信・宮本佐知子・川村紀子・趙哲済・酒井一光							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2009年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
おおさかじょうあと 大坂城跡	おおさかじょうあと 大阪府中央区 上町1丁目	27120	-	34° 35' 49"	135° 29' 46"	20080118 ～ 20080509	1,370㎡	大阪府営住宅の 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
大坂城跡	宮都 都市	古墳時代		柱穴		須恵器		
		古代				瓦		
		近世		井戸・土塋・落込み		陶磁器・土器・石製品・土製品		
		近代		畠・溝・長屋建物		陶磁器・土器		

圖 版



1928(昭和3)年撮影調査地周辺の航空写真



調査地遠景(北東から)



1 区西壁地層断面
(東から)



1 区東壁地層断面
(北西から)



1 区西南隅で
検出した小断層
(北から)

3区全景
(南から)



SP281検出状況
(西から)



NW04-2次調査
8トレンチ
(北から)





SE94検出状況
(南から)



SE122検出状況
(北から)



SX190地層断面
(北から)



1区東半第3c層上面検出状況(東から)



1区東半第3a層上面検出状況(東から)



1区第2a層上面検出状況(西から)



1区第2a層上面検出状況(東から)

通路検出状況
(西から)



便所・水琴窟
(SK02・54・55)
検出状況
(南から)



炉1 検出状況
(東南から)





S=1/3



上：後期難波宮の瓦 下：SE94出土土製品

大坂城跡XI

ISBN 978-4-86305-018-1

2009年3月19日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社

**Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume XI

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Prefectural Apartmenthouse

March 2009

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Osaka Castle Site in Osaka, Japan**

Volume XI

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Prefectural Apartmenthouse

March 2009

Osaka City Cultural Properties Association